

Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ 妹へ送るエール

ハープ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一ここに、ある運命を知る少女がいた。

運命と異なる道を歩む世界で、少女は何を思い、何をなすのか：プリヤ以外のFatteシリーズを知る少女がプリヤ世界で頑張るお話です。

処女作です。HFの映画を観て結末を思い出したのと、UBWの事も考えるとイリヤって損な役回りをしていると思い、イリヤを幸せにできるプリヤを書いてみました。

感想、表現のアドバイス、その他是非頂けると嬉しいです。

追記

主人公の心情に矛盾が起きたため私の中で大幅修正が必要になり、練り直しにしばらく凍結します。新しく書き直してこれは消すかもです。

目次

	序幕	第1話	始まりの地獄	1
序幕				
第1話	始まりの地獄			
第2話	私の名前	6		
第3話	芽生える決意	10		
第1幕				
第1話	崩れる日常（前編）	17		
第2話	崩れる日常（後編）	10		
第3話	初陣、そして邂逅	6		
第4話	問われる意志	4		
第5話	敗北、そして特訓	2		
第6話	妹を守るのは姉の役目	1		
第7話	束の間の休息			
第8話	告白、そして…			
第9話	守りたい日常			
第10話	チカラの胎動			
第11話	揺れる想い			
第12話	無限の剣製			
第13話	舞い戻る少女			
		128 120 114 106 103 96 82 68 56 40 32 28 17 10 6 1		

序幕

第1話 始まりの地獄

??? s i d e ?

——それは、地獄だつた。

街だつたものはみな崩れ落ち、荒れ狂う炎に焼かれている。

黒煙が立ち込め、最早自身の他に生命があるのかも疑わしい。

なんて、のたまつてゐる場合じやない！

何なのこの状況は！さつきまでいたつて普通の日常生活してたよね！？

何がどうなつたらこんな状況になるの！？

突然身に降りかかつた危機にパニックに陥りながら、取り敢えず伏せようかなどと思えば、身体が3、4歳くらいまで戻つてゐる事に気づく。

いや、戻つたというより、これは自分のじやない？

更に頭の混乱する事態に処理落ち寸前だつた私の目に、何か炎や煙とは違つたモノが映つた。

……………え？

それは、一見すると黒い泥のようにも見えるモノだつた。

しかし、まるで意思があるかのようなその動きが、ただの泥だとう考えを否定する。

何より、その泥から満ち溢れる邪悪な気配は、ソレの正体を伝えて有り余つた。

はい？この世全ての悪？

じゃあ何かここはあるの冬木なの！？つて、あれ、なんでそんな事知つて……？

いやそんな事は今どうでもいいすぐ逃げろ兎に角逃げろひたすら逃げろっ！何がどうなつてとかそんなの後……つ！？

身に迫る危険に、一旦疑問を全て棚上げにして瓦礫の向こうに逃げ

ようとしたものの、身体が小さい事を忘れていた私は、身体の動きがイメージと合わず躓いてしまう。

……ヤバイっ！

すぐそこまで迫っていた泥を前に、何とか泥の流れの外に身体をすらそうと飛び上がったが、間に合わず腕が泥に触ってしまった。

ああああああああつ！？

跳んだときの勢いのお陰で触っていたのはほんの一瞬だつた筈なのに、まるで何万時間もの間拷問され、殺され続けたような錯覚を覚えた。

何とか我を取り戻して、分かつた事はただ一つ。

……次あんなのに取り込まれたら正氣を保てる気がしない。

今 の接觸で本物だと理解させられた分、危機感が強まつた。

今は瓦礫が泥を向こうに押してくれているけど、いつこつちに来るかも分からぬ。

……さて、どうしたものか。

逃げなければ、とはいいうものの、はつきり言つて打つ手がない。かたや瓦礫とその向こうにこの世全ての悪。

かたや燃え盛る炎。

この二つに挟まれてしまつている現在、一体どうしろというのか。

…………泥より火の方がマシ！

さつきの接觸で感覚がマヒしているのか、普通なら絶対に取らないような選択肢を迷い無く掴む。
せえ、のつ！

↙ ??? s i d e o u t ↘

↙ イスカンダル s i d e ↘

まったく、此度の聖杯戦争、厄介な事になつたものよ。
まさか聖杯が穢れてしまつていようとはなあ。
おまけに、中身が半ば暴走して街を襲つておる。

他のマスター や生き延びたサーヴァントと生存者を探すのはいいが、果たしてこの状況でそんなものいるのかどうか……。「せえ、のつ！」うん？

生存者など諦めかけていた時、場違いな可愛らしい掛け声が聞こえてきたかと思えば、炎の壁から小さな少女が飛び出してきた。

……あー、うむ、何とも元気な娘よの。

流石の余も絶句していると、

「熱つゝ～！やつぱり熱い～！」

などと地面を転がって騒いでいた。

「生身で炎をくぐれば当然であろう。全く、何ゆえそのような真似をしたのか？」

あまりに可笑しいので思わず突っ込むと、やつと氣付いたのかこちらを見て……うむ？ 何やら呆然としているが、どうしたというのだ？

／イスカンダル side out／

／??? side／

トチ狂つたからつて炎の壁を強行突破なんてするものじやない。運良く身体に火は燃え移らなかつたものの、全身を襲う熱さに悶えて思わず転がる。

つていうかホントにヤバイ、肺の中焼いたんじゃ…。

などと心配していると、

「生身で炎をくぐれば当然であろう。全く、何ゆえそのような真似をしたのか？」

などとツッコまれてしまつた。

ええ、まったくもつてその通りでございます。
……はい？

一瞬素直に反省しかけたけど、人がいた事に驚いて声の方を向くと

……ナゼアナタガココニイルンデスカ

いや、だつて記憶だとこの時もうイスカンダルやられてるはずなの

に生き残つてゐるつておかしいぢやないですか。また別の世界なの？
つて、だからどうしてそんな事知つて……ああもうこれも後!
取り敢えず子供っぽく上手く対応しないと……！

「?? s i d e o u t 」

「イスカンダル s i d e 」

少しほーつとしておつたが、今度は何か慌てておるな。
と思つておつたら、

「向こうに、ゴホツ、黒くて嫌なドロドロ、ケホツ、したのが……！」
などと言ふではないか。

ふむ……聖杯の中身ではないのかそれは！

さつさとこの娘を連れて離れるにかぎ……いかん！

ふと娘の後ろをみれば、それらしいモノがこちらに向かつて來てい
た。

「掴まれ娘！」

娘も気付いたのかすぐに余へと腕を差し出し、それを掴んで後ろに
乗せる。

どこかに掴まつたのを確認し、神威ゴルディアスホイールの車輪を開放、空中へと飛び上
がる。

「まつたく、油断ならんな。大事無いか、娘よ」

間一髪躊躇したところで余が問いかけたが、引っ張つた腕も平氣だつ
たらしく、娘は頷いた。

「しかしある前さん、アレだな。初め火の中を突つ込んで来たときは何
の醉狂かと思つたが、なかなかどうして度胸のある娘ではないか。出
会つたのがもう数年先であれば余の臣下に誘つたところよ」

「…………光榮、です…………征服王に……そんな……風に…………言つて
…………もらえ…………」

「うむ?……眠つてしまつたか。

まあ無理もあるまい。

むしろ今までよくぞ生き延びたというものよ。
確かセイバーのマスター達がこの先におつたな。
此度の境界も残り僅か。

後のことば奴らに任せるとするか。

……………そりゃ、余が征服王だと、娘に名乗つたか？

ヽイスカンダル side out ヽ

第2話 私の名前

～切嗣 s i d e ～

「アシリ、この子は大丈夫かい？」

先程見つけた生き残りの男の子の手当てをしている妻に声をかけると、

「ええ、逃げるのに疲れたのと、あとは精神的な部分が大きかつたみたいね。少なくとも肉体的にはほとんど無事よ」

……良かつた。

アシリの言葉に思わずほつと息をつく。

するとそこへ、生存者を探しに火の海の中にいたライダーが戻ってきた。

「おう、やはりいたかセイバーのマスター。スマンがこの娘を頼む」
……正直、あの街の状態から半ば諦めていたので、生存者を見つけて事に驚きつつ、急いで様子を見る。

「いや、まつたく大した娘よ。聖杯の中身がすぐそこまで迫つておつたが、それから逃れる為に炎の中を突つ切つてくるのだからな。

アレが何かに気付く勘の良さ、そして逃げる手段を躊躇わぬ度胸を持った娘よ。

つと、此度の現界はここまでか。最果ての海へは辿り着けなんだが、面白い娘を見つけられたのだから良しとしよう。娘によろしく言つておいてくれ。では、さらばだ！」

そんなことを言い残し、ライダーは退去していった。

事実か疑いたくなる内容だが、それより聞き捨てならない言葉を聞いて慌てた。

「ちよつと待つて、この子、炎の中に突っ込んだの!? だとしたら……」

アシリも気づいたようで、すぐに女の子の様子を確認する。

「やつぱり、肺の中が焼けて、呼吸も辛い状態のはず……それに、これってまさか……!?」

アイリの妙な反応に、更に不安を搔き立てられる。

「一体どうした、アイリ。君の魔術で治療できる範囲を超えているのか？」

「…………そうね、ここまで肺が焼けていると、病院で処置した方がいいのは確か……」

「…………この子、多分一度聖杯の中身に触れている。意識がある内は上手く抑え込んだようだけど、このままだとこつちも危険ね……」

「でも、こんな子供がどうやつて抑えたのかしら……」

「…………状況は想像以上に悪いようだ。」

「今の状態のこの子を救う手段はある。」

「なら、全て遠き理想郷を使う。魔力を籠めた状態でこの子の体に埋め込めば、どちらも治せるはずだ」

「助ける手段があるので、今の僕はそれを躊躇わない。僕は、自分に埋め込んでいたアヴァロンを取り出し、女の子に移した……」

「切嗣　　side　　out」

「???　　side」

「…………う、ん…………ここは、病院？」

「何で……あく、そういうえば、征服王に助けてもらつた後の記憶が……寝てた？」

「…………うか確かに肺が焼けて結構ヤバかつたはずなのに、何でもう治つてるの？しかもなんか体軽いし。」

「などなど疑問の尽きない中、病室に誰かが入つて來た。「気がついたみたいね？もう、話しても大丈夫かしら？」

「…………驚きのあまり絶句してしまった。」

「征服王が最後まで生き残つていた時点で謎の記憶にある世界ではないと分かつてはいたけど、まさかアイリスファイールまで無事だなん

て。

「えへと、まだ待つた方が良かつたかしら？」

……ハツ！しまった、つい考え込んで……誤魔化さないと

「う、ううん、平気。お姉さん綺麗だつたから、ちょっとビツクリしちやつただけ。お姉さん、だあれ？」

そう返すとアイリスフイールさんはホツとしつつ嬉しそうに微笑んで、

「ああ、まずは自己紹介からよね、ごめんなさい。私はアイリスフイール・フォン・アインツベルン。長いから、アイリさんでも、何ならママでもいいわよ？」

「はーい…………？ ママ？」

何故そんな呼称が選択肢にあるのでしょうか

「あら私つたらいけない。今日来たのはその話……」

ねえ、いきなりで困ると思うけれど、孤児院に行くのと、お姉さんの家に来るの、どっちがいいかしら」

なるほど、それでママ……嬉しいし行きたいけど、コレって行つても大丈夫かな……？

私が介入したせいでB A D E N Dとか怖いけど……

「やつぱり、急に関係のない人にこんな事言われても困つちやうわよね……」

私が考え込んでいるのを戸惑つていると見たのか、アイリさんが顔を曇らせる。

…………まつたく、卑怯な。

そんな寂しそうな顔をされて断れるほど私は冷たくない。

そうと決まれば、

「あのね、アイリお姉さん」

「！なに、かしら」

「……私ね、前の事とか何にも覚えてなくて、自分の名前も分からないの。……だからね！お姉さん、私に名前つけて！そしたらお姉さん、私の名付け親！ほら、関係なくないでしょ？」

初めは私の言葉に悲しそうな顔をしていたけど、続く話にみるみる

顔を綻ばせて、

「じゃあ、ウチに来てくれるの!?」

と、こちらまで嬉しくなるような笑顔で聞いてきたので、私も笑顔で頷く。

「それで、どんな名前付けてくれる?」

「そうね……(折角だもの、AINツベルンの苗字をつけちゃおうかしら)……エール、なんてどうかしら。『エールスファイール・フォン・AINツベルン』……気に入つてもらえると嬉しいのだけれど」

エール、か……うん、悪くない。むしろ良い。

「……うん、いい名前!それじゃあ……」

そう言つて、私はベッドから下り、くるりと回つて心からの笑顔と共に告げる。

「私の名前はエール!エールスファイール・フォン・AINツベルン!これからよろしくね!ママ!」

……これから先、私達にどんな未来が待つてているのかは分からない。

でも、これで…いいよね?

”エール” s i d e o u t ”

第3話 芽生える決意

エール side

「退院おめでとう、エールちゃん」

「えへへ、ありがと、ママ」

ママから名前をもらつてから一週間が経ち、ようやく退院できた私は、ママと一緒に家へと向かっている。

正直、身体はとっくに治っていた一回復速度が尋常じやなかつたし、全て遠き理想郷^{ヴァロ}でも入れられてるのかもしれないーので、改めて言われると少し照れくさい。

「じ、じやあ、やつと会えるよね！ ママがずっと話してた、私のお兄ちゃんと…妹？ でいいの？」

照れ隠しも兼ねて聞いてみる。私の方がハッキリしないけど、年は同じ年くらいらしい。

「そうね……貴女の方がしつかりしてそうだし、イリヤのお姉ちゃん、お願いできるかしら？」

そんな笑顔で頼まれたら断るなんて選択肢はない。元々断る気もなかつたけどね！

「もつちろん！ 任せてママ！」

そんな思いで、胸を張つて主張する。サムズアップのおまけ付き。

……なんか、行動が肉体年齢に引っ張られて来ているようだ。

「あら、頼もしいわね。……それと、申し訳ないのだけれど、貴女を送つたら、私と切嗣…私の夫ね。私達はしばらく出掛けないといけないの」

「そうなの？ ちょっと寂しいかな。でもどうして？」

正直ホントに寂しいし、イリヤを置いて長期間家を空けるなんて信じられなかつたんだけど……

「えっと、色々やらないといけない事があるの……と、はぐらかされてしまつた。

「ふくん、そつか。でもたまには帰つてきてよね！」

「…ええ、約束するわ」

そういうしていいる内に家に着いたみたい。

…やつぱり武家屋敷じゃないんだ。まあ、普通の家の方が落ち着くからいいけど。

「…………」

「?どうかしたの?エールちゃん」

「えつと、入る時つてただいまいいの?初めてに入るけど」

なんだかちよつと変な感じがする。自分の家だけどまだ自分の家じゃない、というかなんというか……

「もちろん、ただいまいいと思うわ。ここはもう貴女の家なんだから」

「…………そつか。そうだよね」

難しく考えるのはやめよう。ここは今日から私の家。なら迷う必要なんてない。

「ただいま」

……ふふつ。なんかいいな、こういうの。

なんて小さな幸せに浸つていると、

「お帰りなさいませ、奥様。貴女がエールさんですね。奥様からお話を聞いております。

私はアインツベルンのメイドのセラと申します。これからよろしくお願ひします。」

あー、えつと、なんというか……

「セラかたつい。エール困つてる」

堅苦しすぎて微妙に引いていたけど、誰かが私の内心を代弁してくれた。

「リーゼリット!貴女はだらしがなさ過ぎるので!というか、イリヤさんの事を任せていたはずですが?」

「シロウに預けた。あ、私はリーゼリット。長いからリズでいい。よろ~」

「うん!私エール!よろしくリズ!」

こっちの方が楽でいいなあ。あ、

「リーゼリット！貴女は自分がメイドだという自覚があるのですか！こちらにきてからというもの、日に日にだらしなくなつて……クドクド……」

なんか長くなりそう……って、リズが目で助けを訴えているような。……よし、ついでだから助けてあげよう。

「ねえねえリズ、イリヤ達つてど、？」

「ん、こつち。セラ、私はエールを案内する。そことくどこか勝ち誇つているリズに、セラが悔しそうに歯噛みしている。……ちょっと悪い事したかも…。

「ぐぬぬ…おのれリーゼリット。……まあいいでしよう。改めて、エールさん達は任せましたよ。私は夕食の準備があるので」

おお、流石プロ。切り替えが早いね。

「エール、イリヤ達はこつち。セラの事は気にしなくていい」

「あ、うん！」

そうだった。今はこつちが大事。さてさて、どんな感じかな♪

「ほい、この部屋」

あ、着いた。どれどれ……

取り敢えず気付かれないようにそつとドアを開けると、「おにいちゃんっ」

そこには、なんとも微笑ましい兄妹の姿があつた……。

こんな時間を過ごせなかつた結末を知つているからこそ、その光景が一層尊く、侵し難いものに見えた。

……もう少し、このままにしておこうかな。

「どうかした？」

一向に入ろうとしない私に、リズが声を掛けてきた。

「……うん。もう少しだけ、見てたいな、つて……」

「？」

リズが私の返事に首を傾げつつ、部屋の中を覗き見ると、

「……納得。でも子供が空氣を読む必要はない」

「え？……!?……ちよ……!?……？」

とつさに逃げようとしたり、力でリズに勝てる訳もなく、部屋に

入れられてしまつた。

「…………」

「えーと、あはは…」

驚いて固まつてゐる二人。

無言の視線が辛いので何か喋つて下さいお願ひします。

「あー、今日からウチに来る子、だよな。俺は衛宮士郎。君と同じでここに引き取られて來た。それでこつちが…」

「イリヤだよ！イリヤスファイール・フォン・アインツベルン！あなたのなまえは？」

そんな私の切実な願いが届いたのか、自己紹介をしてくれた二人。あどけない笑顔で迎えてくれるイリヤが可愛い。

さて、きつかけ作つてくれたんだから私もしつかりしないと。

「私はエール。エールスファイール・フォン・アインツベルン。今日からイリヤのお姉ちゃんだよ♪」

よし、取り敢えず挨拶は悪くないかな……。およ？士郎が何か疑うような目をしている気が……

「どうかした？えっと、士郎お兄ちゃん？」

うん、呼ぶの長い。

取り敢えずお兄ちゃん呼びしたけど、なにかのタイミングで呼び捨てよう。

「あ、いや、その…二人が同じくらいに見えたから、ホントに姉なのかな、つてちょっと」

あ、それか。そういう細かいところを突つつくから将来余計な事言つて痛い目に……。まあ、今それはいいか。

「ママの決定です！」

この家における最高権力者の言葉は絶対。

「つて事だから、これからよろしくね、イリヤ」

「うん！えへへ」

頭を撫ると、気持ちよさそうに目を細める。

……綺麗な笑顔。こんな風に笑うことの出来なかつた世界を、私は知つてゐる。

せつかくの幸せなんだから、ずっとこんな風に過ぎさせてあげたい。

そんな風に思つていると、ふと私達以外の気配がした。

「…………いつから覗いてたの？ママ、とおじさん」

私がそう言うと、扉の陰からママと見知らぬおじさん（笑）が出てきた……。すぐ傷ついた顔してるけど。

「うーん、エールちゃんが誰か喋つて、顔してたあたりから？」

あ、あれを見られた…!?

「それってほとんど最初からじやない！もう、いたなら出てきてもいいのに…」

思わず顔を赤くして叫ぶけど、ママはどこ吹く風。
……一緒に帰つて来たのに忘れてた私が悪いか。

「それで、そのおじさんは？」

頭を切り替えて一応初対面の人について聞く。さつさと聞いておかないとボロを出しそうだし、ここで名前を聞き出しておくとしよう。

「おじさん……」、こほん。僕は衛宮切嗣。アイリの夫だ。君から見れば、パパ、ということになるかな」

どこか傷ついたような表情を見せつつ、自己紹介をしてきたけど、ふむ……パパ、パパ？

「な、なにかな。僕を見ながら唸つているようだけど」
「…………なんか、パパって呼び方合わない」

グサツ！

あれ、なんかやつちやつた？

切嗣が泣きそうな顔で崩れ落ちてしまつた。

「奥様、夕食の準備ができましたが、つて、何故旦那様が泣き崩れいるのですか!?!?」

すみません私のせいです。

「エールがおじさん呼びしてパパって顔じやないつて言つたらこうなつた」

あ、リズダメ。繰り返さないであげて。

改めて言われた事を確認させられたのがトドメになつたらしく、とうとう切嗣が声を上げて泣き出してしまつた。

閑話休題。

「じゃあ、行つてくる」

さつき言つていた通り、ママと切嗣は出掛けちやうみたい（切嗣は何とか持ち直した）。

……正直、二人が出かける目的には、心当たりがある。

聖杯戦争。

これに関わりがあるのは間違いない。

仮に今回二人が聖杯戦争を終わらせていたとしても、大聖杯や、小聖杯であるイリヤは魔術師達に狙われる可能性は高い。

多分、そういう連中からイリヤを守る為に戦うのだろう。

「本当にごめんなさい。もう少しいてあげたいのだけれど……」

……もう。私達の為に戦ってくれるんだから、そんなに謝らなくてもいいのに。

「ですが仕方がありません。留守は私どもが責任を持つて預かります。どうか御安心下さい」

セラがそう言つて送り出そうとするが、ママはまだ名残惜しそうにしている。

……はあ、しようがないなあ。

黙つて見送るつもりだつたけど、ひとこと言つておく事にした。

「もう、やる事があるんでしょ？早く終わらせて帰つてきてね。それまで……」

そこまで言つて言葉を切る。

これは私の誓い。子供っぽく振る舞うのをやめて、今だけは真剣に言葉を紡ぐ。

「それまで、イリヤの事は私が守るから。もしあの火事みたいな事が起きて、絶対に。

あの時私を助けてくれたあの人と、ママがくれたこの名前に誓つて、約束する」

言い回しは子供っぽくしたんだけど、やっぱり変だつたかな。みんなしてびっくりした顔してる。

「だから、頑張ってきてね！ママ！」

誤魔化しに子供モードに戻す。

「……ええ、お願ひね。私も頑張つてくるから」

こうして、ママ達と別れ、そして同時に、私の新しい生活が始まつ

た。

↙エール side out ↘

第1幕

崩れる日常（前編）

シリヤ s i d e s

キーンコーンカーンコーン

終業の鐘が鳴るとすぐに、私は荷物をランドセルにしまって、外に向かつて駆け出す。

途中で藤村先生が何か言っていたような気がしたけど気にしない。素早く靴を履いて、校門に向かうと、丁度目的の人物が見えた。

「お兄ちゃん！」

「お、シリヤも今帰りか？」

私が大声で呼ぶと、お兄ちゃんがそう返してくれた。

「うん！お兄ちゃんもすぐ来るとと思うし、一緒に帰ろう！」

せっかく今日はお兄ちゃんの部活がない日なんだし、一緒に帰らないともつたいない。

そんな事を思つていると、

「もう、気持ちは分かるけど、急ぎ過ぎ、シリヤ。ほら、忘れ物。ちゃんとしまつてから出なさい」

「う、ごめんなさい。気をつけます」

あはは……やつちやつた。

お姉ちゃんには敵わないなあ。

お姉ちゃんは綺麗で頭も良くて、運動がちょっと苦手（といつても他と比べてで、全体から見たら十分能力は高い）な事以外は完璧な優しいお姉ちゃんなんだけど、怒らせると恐いらしい。

お姉ちゃんが怒つてるとこなんて見た事ないけど、誰か怒らせた事あるのかな？

「うん、分かればよろしい。それじゃ、帰ろつか」

「ほら、やっぱり優しい。」

「はーい！ そうだ！ みんなで家まで競走しようよ！」

「競走つて、俺自転車だぞ」

「平気平気！私走るの得意だから～！」

そう言つて私は一番に走り出す。

「あ、イリヤ～！」

「まつたく、付き合わされる私の身にも…もう、しようがないなあ」「なんだかんだ言いつつ、二人とも付き合つて走つてくれる。

……ふふつ。幸せだなあ。

「イリヤ side out」

「エール side」

つ、疲れた……いつも思うけど、やっぱりイリヤつて足速い。
つていうかなんでのスピードでずっと走つていられるの。

なんてことを思いながら走つていると、いつのまにか家に着いていた。

「「ただいま～！」」

「イリヤさんエールさんお帰りなさい。…士郎も一緒でしたか」

「ああ、校門で会つたからな」

セラといつも通りの挨拶を交わす。

「そう言えばイリヤさん、昼間に荷物が届いてましたよ。確か中身は…DVD？」

DVD？あー、アレかな？

「ホント？？もう届いたんだ！」

聞くや否や、イリヤがトテテ～、トリビングへ走つていく。

ふふ、この反応はやっぱリアレだね。

「あー～～？」

ん？どうしたんだろう？

イリヤが急に叫んだので私も様子を見にリビングに向かうと、

「リズお姉ちゃん、なんで先に觀てるの～～？」

「お金払つたの私」

「そうだけどー！」

届いたDVDを観ているリズと、それに憤慨しているイリヤがいた。

「何かと思えば…」

「アニメのDVDか」

あ、セラ達もきた。

「ああ、イリヤさんもすっかり俗世に染まつてしまつて……」

俗世つて……まあアインツベルンは貴族だけね？」

「まあまあセラ。いいじやない、別に。ハマリ過ぎなければ。……せつかく平和なんだもの、ごく普通の幸せに浸つてもバチは当たらないんじゃない？」

「エールは大げさだなあ。でもまあ、いいんじやないかな、これぐらいい」

私がセラを宥めにかかると、士郎も続く。

別に、大げさでもないんだけどね。

「……まあ、そうですが。それはそれとして、士郎！ 貴方がそんなだからクドクド…」

あ、また始まった。私に飛んでこない内に部屋に行こう。

……この家に来てからもう7、8年経つ。

最初こそ顔と名前が合つてないってからかわれたりしたけど、スルーしてれば大体すぐ収まつたし、今はクラスのお姉ちゃん的存在になつてている。

もつとも、イリヤによると、同時に絶対に怒らせてはいけない人として恐れられてもいるらしいけど……あれ、私のせいじやないし。イリヤが詳しい内容知らなくて良かつた。流石にアレは知られたくない。

そんな事を思いつつ、あの時の事を思い出す。

あれは、小学校の低学年の頃。あの頃私は、顔と名前が噛み合つて

――――――――――――――――――――――――――――――――――

いなくて変、という理由で嫌がらせをされていた。

まあ、理由は違えど嫌がらせは昔にもあつた気もするし、反応すれば相手が喜ぶだけだと相場が決まっているのでスルーしていた。

けれど、思つたより悪質な奴だつたらしく、ある時放課後に屋上に呼び出してきた。

ケリをつけるのに丁度いいかと思つて乗つてあげたけど、いざ行つてみれば結局いつもと大して変わらない事を延々と言つてくるだけで退屈だつた。

何を言われてもどこ吹く風だつた私が気に入らないのか、連中は悪口を言う対象を私からイリヤへと変えた。

怒りを抑えきれず私が思わず表情を歪めると、つけあがつてだんだんエスカレートし、イリヤに直接手を出すなどと言い始めた時、私の中で何かが音を立てて切れた。

「……今なんて？」

「へ？」

間抜けな声をあげる二人の喉元を掴み、そのままフェンスに押し付ける。

「お前らが氣に入らないのは私じゃなかつたの？どうしてそこでイリヤが出てくるの？そつちがその氣なら、今この場からフェンスごと下に叩きつけてあげようか？」

ギリギリと力を加えていくと、二人の顔が恐怖と苦悶に染まつていく。

そのまま締め続けることも出来たけど、これ以上は本当に死んでしまう。

キレイではいたが、流石に本気で殺しをする程理性は蒸発しきつてはいない。

私は手を離し、へたり込む二人に、「もしイリヤに手を出してみなさい。その時は二人の首がへし折れる時よ」と、去り際に言つてやつた…………

――――――――――――――――――――――――

あー、うん。私のせいかな！ちよつとやり過ぎたし。

あの二人、あれがトラウマになつたらしく、私を見るなりすぐ逃げるし、イリヤにはペコペコしてるんだよね……。ま、自業自得か。

「エールさん、夕食の時間ですよ！」

あらら、いつのまにかそんな時間。不愉快な事は忘れてご飯ご飯つと。

……でも、こういう不愉快な事を思い出した時つて、ろくな事がないんだよね……何もなければいいけど。

エール side out

イリヤ sides

今、私は夕ご飯の時のお姉ちゃんの言葉を思い出していました。

「あ、イリヤ。観たい気持ちも分かるけど、今日は早めにお風呂に入つて寝た方がいいよ。：：なんか嫌な予感がするんだよね！」

こういう時、お姉ちゃんの予感はよく当たる。

そう、分かつてはいたけど、結局我慢できずにDVD一クールを一気に観て、お風呂に入るのが遅れて……

「イヤッホー！素敵ですよイリヤさん！」

こんな、魔法少女の姿になる羽目になつてしましました。

「つて、ホントに魔法少女なの!?」というか、いつの間に外に出ちやつたの!?!?」

「いや、流石にあのお風呂場は転身には少々手狭でしたので、つい☆混乱する私に最悪の事を告げてくるこのステッキ。

「ハダカで外に出ちやつたの!?!?」

「大丈夫ですイリヤさん。結構お似合いですよ。前のマスターよりよっぽど」

そういう問題じやないよ……。

私が内心で崩れ落ちていると、

「へえ～、それは良かつたわねえルビー？」

なにか、すぐ怒っている女の人が、私達の目の前に立つていました……

イリヤ side out

エール side

今の魔力は!??

イリヤより一足先に寝ていた私は、突如近くで発生した魔力を感知して飛び起きた。

あの日泥に触れて以来、私は魔力…特に、イリヤやママ達小聖杯の魔力に敏感になつていて、魔術回路を開いていなくても冬木市内であればどこにいても感知できる。

……話が逸れた。取り敢えず私は窓から外を見ると、丁度真下辺りにイリヤがいた。

……何故かアニメみたいな魔法少女の格好で。

何やつてるのあの子は。……ん？

ふとイリヤの視線の先を見てみると、指を銃の形に構えている、赤服を着たツインテールの女性がいた。

つて、あれ凛!?何で……!?しかもガンド構てる!?

予想外の人物に一瞬パニックになり、気付いた時には既にイリヤに向かってガンドが放たれていた。

イリヤ！…………あれ？

イリヤがケガでもするんじやないかと思つたけど、どういう訳か全くの無傷。後ろの菜園はボロボロなので、空砲的なものではないことが分かる。

どういう事が疑問に思つていると、

「お忘れですか～凛さん？魔法少女にはAランク相当の魔術障壁等が常時展開されているんですよ？今の私達にそんな豆鉄砲が効く訳な

いじやありませんか？」

なるほど、そういう事。

大変分かりやすい解説有難うございます。

都合良くステッキ（つていうかアレよく見たらルビーだ。ループする四日間で凜のメンタルKOした奴……嫌な予感の正体はアレか）が解説してくれたので、取り敢えずイリヤが無事な事が分かりホツとする。

大声で話しているルビー以外の声は聞き取れないけど、凜結構キレてるよね……！閃光弾!?

突如視界が真っ白になり、何も見えなくなる。

マズい。魔術はともかく物理でこられたらイリヤが無事か分からぬ。

直前までの位置関係から、接近していればそこにいるであろう位置に、たまたま机の上にあつたコンパスを全力で投擲し、窓から飛び降りる。

イリヤの日常を壊そうとするなら、誰であろうと許さない。

私の中で何かが切れる音がしたのと同時に、地面に着地する。

「うちの妹に、何してくれようとしてるのかしら？」

↙エール side out ↘

↙凜 side ↘

まったく、このバカステッキのせいで無駄に一般人を巻き込んでやつたじゃない。

宝石の魔力を開放して閃光弾がわりに使つて、ルビーがくつついた少女に指を向けながら、内心で愚痴をこぼす。

：まあ、取り返すにせよ手伝つてもらうにせよ、一旦このバカを止めないとね。

ゼロ距離ならガンドでも障壁を突破できる。

私が指に込めた魔力を放とした時、

……!? 何か来る！

咄嗟に後ろに下がると、直前まで私がいた場所に、コンパスが突き刺さっていた。

……は？ コンパス？ しかも地面に完全にめり込んでるつてなに？

今までガンドやら格闘やら武器やら、色々と戦闘時に見るものはあつたけれど、こんなものを使つてくる奴なんて知らない。流石に一瞬呆然としていると、

「ウチの妹に、何してくれようとしてるのかしら？」

そう言つて、一人の少女が上から飛び降りてきた。

少女の姉を名乗るこの子は尋常じやない殺氣を放つていて、話を聞いてくれるとは思えない。

二人目の一般人……しかも話し合いの出来る状況じやない。益々厄介な事になつたわね。

＼ イリヤ side out ／

＼ イリヤ side ／

あれ？

急に周りが真っ白になつて軽くパニックになつていた私は、視界が元に戻つても何ともない事にちょっと不思議に思つた。

「コンパスで凛さんを牽制するとか、なかなかすごい人ですね、埋まつちやつてますよアレ」

へ？

よく見たら、私の目の前の地面上に、コンパスが突き刺さつていた。

それはもう、深々と。

あれ、でもこのコンパス、どこかで見たような……？

そう思つてみると、

「ウチの妹に、何してくれようとしてるのかしら？」

なんと、お姉ちゃんが上から飛び降りてきました。

「お、お姉ちゃん？」

どこかいつもと雰囲気の違うお姉ちゃんに恐る恐る声を掛けると、「イリヤ、話は後。取り敢えずこの虫と、そのガラクタを始末するから」

今まで聞いたこともないくらい冷たい声で、そう返してきた。

コワッ！お姉ちゃんどうしちやつたの？？？

『エールつき、怒ると大河もビビって逃げるぐらい怖いってホント？』

何年か前、友達にそんな事を聞かれたのを思い出す。あの時はそんな訳ないって思つてたけど、今のお姉ちゃんを見てると、それぐらいになつても不思議じやないって思えるぐらい怖かつた。

「ウワーオ……随分と怖ろしいお姉さんですねー。普段からこんな感じなんですか？イリヤさん」

「違うよ！？普段はすつごく優しいお姉ちゃんだからね！？……私だつて初めて見たよ……こんなに怒つてるお姉ちゃん。今まで叱られた事はあるけど、怒られた事はないし」

そう、今日だつて忘れ物をしたのを叱られただけ、優しく諭してくれるような感じで、あんな風に感情的になつて怒るところなんて見たことがない。

「ふむふむ。となると、お姉さんが怒るのはイリヤさんに危害を加えようとした時、という事になるのでしょうか？あれ、ルビーちゃんピンチ！？』

「私の……為？」

そう言われると、お姉ちゃんの性格的に、しつくりくる気がした。

…つて、ウソー！

「あの凛さんを瞬殺…マジでヤバいですね、イリヤさんのお姉さん」
いつの間にか、私達が話している間に、お姉ちゃんが凛さん？を沈めていた。

「姉は無敵なのよ」

そう言いながら、私は正確にはルビーの方に近づいてくるお姉ちゃん。私に向けられたものじゃないと分かつてはいても、その凄まじい

までの殺気に思わず泣きそうになる。

「お、落ち着いてください、イリヤさんのお姉さん！まずは事情を説明する権利をください！」

流石のルビーも身の危険を感じたのか、必死に説得しようとすると、「あ、あの、お姉ちゃん？」

私が半泣きでお姉ちゃんに声を掛けると、

「…………!!?」

一瞬目を見開いて、バツが悪そうにしながら足を止めた。
……もとに戻つてくれた、のかな…………？

イリヤ side out

エール sides

やつちやつた……。

コンパスで毒氣を抜かれた上に、子供と侮っていた凜の鳩尾と首筋を全力で叩いて無力化したまではいい。ルビー諸共イリヤにまで殺氣を向けるとか何やつてるのよ私は……。

助けるはずが逆に泣かせてしまつた事に対する罪悪感が半端じやない。

イリヤの泣き顔を見てひとまず落ち着いた私は、

「…………取り敢えず私の部屋に来なさい。詳しい話は後で聞くわ」

そう言いつつ、後ろに振り返つて、

「貴女もそれでいいでしよう？ いつまでもやられたフリしなくていいから」

そう言つてやつた。

「…………結構本気で痛かつたんだけど。アンタ一体何者よ」

あら、ホントに効いてたっぽい。ちょっと悪いことしたかも…まあいいか。

「さつき言つたでしょ、この子の姉よ。イリヤ、私は窓から戻らないといけないから、取り敢えずなんとかセラ達を誤魔化しておいて。まつ

たく、せつかく忠告したのに聞かないで……」

「うつ……ハイ、スミマセン」

さて、長い夜になりそうね……

エール side out

第2話 崩れる日常（後編）

凜 side~

うう、まだ痛い……この子一体何者よ。
いくら油断してたからって一瞬でこの私を倒すなんて。

そんな思いと共に、あの子が来るまで睨みつけてたけどどこ吹く風。まったく反応しない。

「な、なんとか誤魔化してきました…。えと、それで、何がどうなつているんでしょうか」

「……そうね、取り敢えず話してあげる。私は遠坂凜。魔術師よ」
疑問は尽きないけれど、ひとまず後。

私がそう自己紹介すると、

「…何か変な単語を聞いた気がするけど、まあいいわ。私はエール。エールスファイール・フォン・アインツベルン。そしてこの子は妹の…」

「イリヤです。イリヤスファイール・フォン・アインツベルン」

「二人も名乗ってくれたんだけど……」

「…………何か？」

「いや、名前の割に似てないのね、つて思つただけ」

「そう、名前のつくりはそつくりなのに、顔立ちがまるで似ていないのだ。」

「血が繋がっていないんだから、顔が違うのは当たり前よ。名前の雰囲気が似てるのは、私が事故でウチに来るまでの記憶をなくしていくて、ママに新しく名前を付けてもらつたから」

「…………めん。ちょっと深入りし過ぎたわ」

思つたより話が深そうだつた。

私が謝罪すると、

「別にいいわ、初対面の人は大抵そういう反応するから。それより、どういう事なのか説明して欲しいんだけど？」

明らかによくなさそうな顔をしてるけど、触れない方が良さそうね。」

私は、ひとまず簡単な説明をする事にした。

「凜 side out」

「エール side」

「なるほど？魔術だなんだとか信じられるかつてツツコミは、この際捨て置くとして。まとめると、英雄の魂である英靈つてヤツの力を秘めたこのカードが、この冬木にばら撒かれていて、それを回収するためにもう一人と来たのはいいものの、回収に必要なステッキに見捨てられ、今に至ると」

また面倒な事を、とついジト目で凜を睨む。

「うぐつ…言い方に棘を感じるけど、概ねそれで合っているわ」

棘？あるに決まってるでしょう。落ち着いただけでまだ許した覚えはないんだから。

「……それで、貴女はどうするつもり？回収しなきやこの街も危ないし、貴女も任務を果たせない。私としては、さっさとコイツを拾つてご自分でどうぞ、と言いたいところなんだけど」

ま、ムリだよね。

「イヤですよー！また凜さんの喧嘩の道具に使われるゴメンです！イリヤさんの方が魔法少女らしくて私の好みですし」

「……聞いての通りよ。私も出来るならそうしたいところだけど、コイツは言う事なんて聞きやしない。でも貴女の言う通り、任務を果たさない訳にもいかない。悪いけど、イリヤにやつてもうしかないのでよ」

……やっぱりそうきたか。

聖杯戦争はもう起こらないと思つてイリヤとの時間を優先したから魔術なんて使えないし、あるはずの魔術回路は起動すらしてない。

つまり、今の私ではイリヤの代わりに戦う事は出来ない。

「…………貴女はどうしたい？イリヤ」

「え？私？」

急に話を振られたイリヤか素つ頓狂な声を上げる。

「…こうなつてしまつた以上、イリヤの意見を尊重するしかない。」

私が言つて無駄だとしても、本人が拒否しているものを無理やりやらせるほど凛は冷たくない。イリヤが嫌がれば諦めるだろう。

「今回頼まれているのはイリヤよ。決めるのはイリヤ。貴女が決めた事なら、私も納得する」

イリヤはしばし悩んでいるようだつたが、

「…やる！お姉ちゃんお願ひ、やらせて！」

「…私としてはやつて欲しくはなかつたけど、どの道知つてしまつた以上は放つても置けない、か。」

「…分かつた。ただし、私も行く。それが条件よ。文句は言わせないわ、凛」

「私はやつて貰えるなら構わないけど、貴女こそいいの？ステッキも無い、魔術も使えない、命の保証は出来ないわよ？」

「言外に来ない方が良い、と言つているのは分かる。」

確かに、なんの力も持たない私はただの足手まといにしかならないだろう。

でも、だからとつて、それがイリヤを一人で行かせていい理由にはならない。

「…そんな事、承知の上よ。私はイリヤを守ると誓つた。なら、誰より私はイリヤの事を見守る義務がある」

「…いいわ。來たければ來なさい。カード回収は明日からやるから、詳しい事はまた後で連絡するわ。それじや、おやすみなさい」

私が折れない事を察したのか、凛は諦めたように認め、窓から飛び降りていつた。

「…それじや、私達も寝ましょう。もう大分遅い時間だし、明日に備えないとね」

そう言つて私はイリヤを部屋へと帰し、布団に入る。

「…結局、イリヤは聖杯戦争から逃れられないのかしら。」

「だつたら、その運命ごと蹴散らしてやるだけよ」

決意を新たにして、私は意識を手放した。

} 工 ル

s i d e

o u t {

第3話 初陣、そして邂逅

↙エール side ↘

「……後で凛には説教が必要かしら」

翌日、放課後の帰り道。私達は今さつき靴箱に入っていた手紙を思
い出していた。

『今夜0時に学校の校庭集合。来なかつたら殺す帰ります』
まつたく、手伝ってくれる人にあんな手紙を出すバカがどこにいる
のか。

「ま、まあまあお姉ちゃん。リンさんも、きっと悪気があつた訳じやない
と思うし…」

「…………ま、今言つてもしようがないしね。それよりルビー？イリヤ
と転身した時、何が出来る？」

氣分を切り替え、今夜の戦闘に備えてイリヤの攻撃オプションを確
認する。

「うーん、あくまで私は礼装ですから、基本イリヤさんに魔力供給と物
理的魔術的な防御を施すだけで、攻撃に関してはイリヤさんのイメー
ジ次第なんですよねー」

「つまり、イリヤがイメージさえ出来れば攻撃できるって事？それ
じゃ、凛はどんなのやつてた？」

「あ、それ私も聞きたい！」

イリヤも食いついてきた。自分の能力知るつて大事だよね。

「そうですねー。メインはやっぱ魔力砲でしようか。英靈には対魔
力があるので、魔術にしてしまうと効果が落ちてしまうんですよー
…………え？ 脳筋？

要するに、魔術にすると効かないから魔力を質量弾として打ち出す
という事だろう。対魔力は知っていたけど、何というか、残念な攻撃
方法だつた。

「それってビームみたいな!? ゴイ！なんかそれっぽい！」

「ビーム以外にもやりようはありますよー？ イメージ出来れば散弾や

一点集中の収束砲も出来るはずです」

別に脳筋って訳でもないですよー、と主張してくるルビー。

……顔に出てたか。

実際、ルビーが言つたことが出来れば、それなりには戦えるはず。
「オッケー、それだけあればどりあえず大丈夫かな。イリヤ、帰つたら
今言つたやつを練習するよ」

「はーい」

さてと、半日足らずでどこまでできることやら。

↙エール s i d e o u t ↘

↙イリヤ s i d e ↘

「では、まずは魔力砲からやつてみましよう！ シンプルかつ高威力！
これを当てられれば英靈相手でもそこそこダメージを与えられるは
ずです！」

お姉ちゃんの提案で、近くの森で特訓する事になりました。
「それじゃあイリヤ、とりあえずそこの木を狙つて撃つてみて」

「はーい」

えと、魔力砲、だつたよね。うーん、こんな感じ、かな？

ルビーを正面に構えて、なんとなくビームっぽいものを打つイメー
ジをしてみたら、

「お見事ですイリヤさん！ まさかの一発成功ですよ！ いや～これには
ルビーちゃんも、ちょっとビックリです」

……なんか、あっさり出来ちゃつた。

「ど、どう？ お姉ちゃん」

あまりにあっさり過ぎて逆に不安になつて、ついお姉ちゃんに聞いてみた。

「うん、いいんじゃない？ つていうかすごいよ。これなら散弾とかも
いけるかな？」

あ、お姉ちゃんもちょっと嬉しそう。

「ルビーー！ 散弾つてどんな感じ？」

「そうですね、霧吹きの水みたいな感じでしようか？ 小さい弾を大量に撃つんです」

「分かった！ やつてみる！」

得意になつた私は、そのままドンドン練習を続けた。

「そろそろ帰りましょう。もう遅いし」

そう言われて、ふと周りを見てみる。

「え？ あ、ホントだ。結構暗くなつてる。思ったより早かつたね」
「なかなか集中してましたからね。すごいですよイリヤさん！ 魔法少女の才能あります！ いや、やはり私の目に狂いはありませんでした！」

「その件については、まだ許した覚えはないからね？」

そう言つて、昨日の殺氣を放つお姉ちゃん。

や、やつぱり怖い。

「ま、それはそれとして、この分なら何とかなるかな。本番も頑張りましょ？」

すぐに殺氣をしまつて、頭を撫でてくれた。

あ、そう言えば、こうやって頭撫でてもらうのって、ちょっと久しぶりかも。ふふつ。よしつ、今夜頑張ろう！

＼イリヤ side out／

＼エール side ＼

「さて、言い訳を聞きましょか？ 凜」

「え、えと、その…、ごめんなさい」

時刻は午前0時少し前。私の目の前、校庭のど真ん中で、凛が正座していた。

理由？私が手紙の件を許していたとでも？

「お、お姉ちゃん。そろそろ許してあげたら？」

「うむ。私としてはもつと説教してもいいと思うんだけど、イリヤにそう言わるとやり辛い。今回はここまでにしておこう。

「……そうね、時間もないし。それで、カードはどこにあるの？」
気持ちを切り替えて、凛にカードの場所を尋ねる。

「か、カードがあるのは校庭の中心よ。ただし、”ここ”ではないけどね。…ルビー！」

「はいはーい！わっかりましたー！境界回廊、一部反転します！」

ルビーの声と共に、足下に魔法陣が浮かび上がる。

「カードがあるのは、無数に広がる世界の境界……。鏡面界、そう呼ばれてしているところよ」

凛の説明を聞きながら、自分達が別の場所へと転移しているのを実感する。

着いた場所は見た目こそ元の世界と変わりがないけど、その雰囲気は完全に別物。

……この気配、あの時の泥と少し似てる…？

何故かあの日の事を思い出していると、校庭の中心から黒く染まつた魔力が溢れ、徐々に形を作っていく。

「来るわ！報告通り実体化したわね…先手必勝！爆炎弾3連！」

魔力が英靈の身体を作ると同時に、凛が宝石3つで炎を作つて攻撃を仕掛ける。

「す、すゞつ！もうやつちやつたんじや…」

イリヤが希望的な言葉を口にするけど、それはほほない。
煙が晴れると、そこには無傷の敵の姿があつた。

……あれ、第五次のライダーよね。

「ちつ。やつぱり魔術になると効かない、か。高い宝石だつたのに。
それじゃイリヤ！後は任せた！アンタも隠れなさいエール！」

言うや否や、脱兎の如く逃げ出し、物陰に隠れる凛。待てコラ。

「え！？投げっぱなし！？」

ああもう！効かないって知つてなんで余計な事するかな！

初手の不意打ちはこつちでも考えていただけに、効果の無い宝石魔術でチャンスを逃したのは痛い。

そんな事を考へてゐる内に、ライダーが鎖付きの短剣を構えるのが見えた。

「つー・イリヤー！ 避けて！ 攻撃が来る！」

凛の逃亡に呆気に取られていたイリヤも、私の声で我に返つて間一髪躲す。

「か、掠つた！ 今掠つたよー！」

「落ち着いて下さい、イリヤさん！ あの程度なら平氣です！」

どうやら躲し切れていなかつたようで、イリヤが軽く怯えている。

「しつかりしてイリヤー！ ソイツは精々中距離までしか攻撃出来ない！ 距離を取つて、安全を確保して！」

「う、うん！ そうだね、取りましょー距離…………キヨリ～～!! ?」

パニックには的確な指示が一番有効。

イリヤも取り乱しながらも距離を取る。

おお、速い速い。

そんなイリヤに一瞬感心しつつ、目線はライダーから離さない。

……どう見ても理性とかないよねあれ。

言葉はなく、外見も禍々しいものへと変化してゐる。その動きもまるで理性的とは言えず、むしろ獸のような本能的なものに見える。

：正直、本来のライダーなら下手に距離を取つたところですぐに詰められるだけだけど、この分ならいける……！

「イリヤー！ アイツは速いけど動きがワンパターンよ！ 先読みして、魔力砲で攻撃！」

「う、うん！」

イリヤに指示を出すと、初めは避けられてしまつて当たらなかつたけど、タイミングを掴んだのか徐々に射線が近づいていき、

「ゴハツ！」

「やりいつ！ いい調子よイリヤー！ もう一発やつちやつて！」

ついに一撃入つた。

私はそのまま押し切ろうと思つたけど、相手は腐つても英靈。 そう

簡単にはいかない。

「な、なんか当たらなくなつちやつたんだけど……!?」

基本的な動きはさつきと大差ないけど、イリヤが構えると同時に動き始めるから当たらなくなつたみたい。

……フツ、甘い。

ライダーの動きは今のイリヤの攻撃には有効だけど、それならこつちも動きを変えればいいだけの話。

私はイリヤに次の指示を出す。

「イリヤ、練習通りにいくよ！ 攻撃を散弾に変更！ 面制圧でアイツの動きを封じて、間髪入れずに最大魔力で砲撃よ！」

「う、うん！ えと、ルビー、面制圧つて？」

あ、そつからか。まあ、普通聞かないよね、そんな単語。

「簡単に言えば、散弾が平面に見えるほど隙間なく広範囲に打つ事です！ 躲されにくく、砲撃には及びませんが大ダメージを与えられます！」

「散弾を隙間なく……うん！ やつてみる！」

ルビーナイスフォロー。こういう時は気がきくというかなんといふか。

解説している間にライダーもまた様子見し始めたし、今がチャンスかな。

「イリヤ！ 打つて！」

「小さいのを沢山…散弾つ！」

「ツ！」

上手くいった。さつきよりも広範囲の攻撃に対応し切れなかつたライダーは、密集した散弾を一部短剣で防いでいるものの、身動きが取れないでいる。

「今ですイリヤさん！ 思いつきり、かましてやりましょう！」

「うん！ 全力、当たつて！」

よしつ！

イリヤの魔力砲がライダーに直撃し、周囲を爆煙が覆う。

これで、倒せていればいいけど……。

＼エール side out／

＼凜 side ／

な、なんのあの子：

私は、目の前の光景を信じられない思いで見ていた。
エールは最初に軽くパニックになつていていたイリヤを宥めて、正確、
かつ冷静に指示を出している。

その上、相手の動きが変われば即座に対応して手を変えている。
それを実行できるイリヤもすごいけど、そのポテンシャルを最大限
に引き出しているのがエールである事は間違いない。

「あの子、ホントに何者なのかしら」

イリヤが作つた爆煙を見ながら、思わず疑問が口をついて出る。
私を倒した時の手際といい、今回のイリヤの指揮といい、小学生の
レベルを遥かに超えている。

「一体どういう事なのかし……ヤバっ！」

「宝具が来るわ！」「一人とも、逃げなさい！」

気が付けば、晴れた煙の先で、黒化英霊が今までとは明らかに違う
体勢を取っていた。

くつ、宝具が使われたらマズいわね……防げればいいんだけど……
！

＼エール side out／

思つたよりもしぶとい……！

煙の向こうから、ボロボロになりながらも未だ倒れないライダーの
姿が朧げながらも見えた。

「宝具が来るわ！」「一人共逃げなさい！」

!? マズい、まだそんな余力が…！

「イリヤ！ 攻撃は後！ とにかく相手の真正面に立たないように逃げなさい！」

初撃はライダーの目の前の魔法陣の一直線上から来るはずだから、とりあえずそれで一旦は凌げるはず…。

イリヤに指示を出しつつ、私も全速力で離脱にかかる。

〔騎英の…〕

血によって描かれた魔方陣が徐々に形を為していき、真名が開放され始める。

間に合うか…………!? こ、この気配は!? ?

突然感じた気配の方を振り返ると、イリヤと色違いのよく似たコスチュームに身を包んだ少女が駆け抜けていった…。

その少女を見た瞬間、

あり得ない、と私の記録は否定する。

事実だ、と私の身体は告げる。

どうして、と私の心は戸惑う。

「…どういう……」と…?」

「クラスカード、『ランサー』イシクルード限定展開

私の疑問をよそに、少女が淡々と言葉を呴くと、ステッキは血のよう紅い槍へと変化し、宝具を展開寸前のライダーの目の前まで接近すると、

〔刺し穿つ——死棘ボルクの槍〕

その槍でもつてライダーを一撃で倒してみせた。

「クラスカード『ライダー』回収完了」

ライダーを倒すと、核になっていたカードが具現化し、同時に槍もステッキとカードに戻っていた。

事が終わつてなお、私は動搖のあまりに動けなかつた。

…どうしてあの子から、イリヤとほぼ同じ、聖杯の気配を感じるの…?

第4話　問われる意志

りイリヤ side り

えーと、どうなつているんでしようか。

お姉ちゃんに言われた通り真正面に立たないように逃げてたら、私と色違の魔法少女が槍みたいなので敵を倒していた。槍はその後ルビーとよく似たステッキに変わった。

もしかしてルビーも同じ事が出来るのかなあ。

「オーッホツホツホツホ！全くもつて無様ですわ！遠坂凜！」トオサカリン

「くつ！この聞いているだけで殺意が湧く高笑いは…！」

そんな事を思つていたらすごい笑い声がして、リンさんがなんか嫌そうな顔で声のした方を見ていた。

私も釣られてそつちを見てみると、

「敵を前にして逃げ惑うなど、所詮貴女は騒ぐ事しか能がない庶民。眞の優雅とは、この私のような人間を言うのですわ！オーッホツホ「うつさいこの金ドリル！」グフツ！」

青い服を着た金髪の人にはりんさんが飛び蹴りを放つていました。

「よ、よくも淑女の延髓にマジ蹴りを…！これだから野蛮人は！」

「ハツ！ざまあみなさい！大体、倒したのはアンタじゃなガハツ！」？

あ、今度はリンさんのお腹にキレイなパンチが。

「……やる気かしら？」

「こちらのセリフですわ！」

あわわわ、どうしよう!?なんかヤバそうなんだけど!??

「あー、また始まりましたか。懲りない人達ですねー」

「ルビー!?もしかして、アレつていつもなの!??」

「そうですよ。オマケにあれを私達を使ってやり始めたりもするんですから、付き合わされる身にもなつて欲しいものです！そんなだから見捨てられるんですよ」

呆れ返つてゐるルビーに聞くと、予想以上の答えが返つてきた。

……なんか、ルビーがリンさんから逃げたのも分かる気がする。

「……とりあえず帰りましょう。なんかこの空間崩れ始めてるし」「うわっ！お姉ちゃん!!？」

いつのまにかお姉ちゃんが私達のすぐそばまできていた。

あれ？でもなんか少し声が固かつたような…？

「そうですね、話でしたら帰つてからでいいですし。…おつと」「え？」

お姉ちゃんの様子を気にしていた私の足下に、来る時と同じような魔法陣が広がっていた。

「先越されちゃいましたね、まあ、私達も送つてくれるっぽいですし、便乗させてもらいましょう」

ルビーがそう言っている間にも、周りがまた来た時みたいになつて、

「帰つて、來た？」

「はい。お疲れ様でした。にしても転移しながらケンカとか、あの二人にはいつも感心します」

あ、ホントだ。まだ殴り合つてる…。そろそろあつちの人達の事聞きたいんだけどな…。

「お姉ちゃん、リンさん達どうしよう？」

とりあえずお姉ちゃんに聞いてみた。

「…そうね。聞きたい事もあるし、止めましょう。イリヤ、あとそつちの子も、耳を塞いでおく事を勧めるわ」

そう言つて大きく息を吸うと、

「……いい加減になさい！」この脳筋コンビ！」

塞いでいても聞こえてくる大声で、お姉ちゃんが雷を落としたのでした…。

／イリヤ side out／

／エール side／

「……美遊、か…」

所変わつて私の部屋。

あの後、とりあえずあのバカ2人を軽く説教して（脳筋よりコンビに反応する辺りホントにどうかと思った）、それぞれ名前だけ名乗つて帰つて來た。

私は自分の中にある記録から美遊の事を詳しく探ろうとしたけど、「第5次の記録はおろか、月の聖杯戦争の記録にも一切出てこないなんて。：人理修復の記録に出てきたのは、この世界から迷い込んだだけっぽいし」

おまけに、その辺りを詳しく探ろうとすると、ノイズが邪魔をして閲覧できなくなる。

ちなみに、最初は自分の記憶と混同させていたから、ちょっと人格にも影響が出た気がするけど、今は私の中で分かれていて、第三者視点として基本的に好きに閲覧出来るようになつていた。

基本的というのは、所々今回みたいにノイズが邪魔をして見れない所があるからだ。

「ま、分からないうなら、どうするかは本人を見て決めていくしかないわね」

そう割り切る事にして、私は眠りについた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

翌日。

「美遊・エーデルフエルトです」

そんな気はしました。

学校に来てみれば、昨日の魔法少女がウチのクラスに転校してきた。

しかもイリヤの真後ろ。羨ましい。

「ハッ!? プリントがない！…みんな、ちょくつと自習しててね！」

都合良く藤村先生が抜けた。と思つていたら、

「私、ちょっとトイレ行つて来るね」

と、イリヤが外に出ていくのが見えたので、私も続く。

「いや、なんともベタな展開ですねー」

「ルビー声が大きい」

「ハハハ…」

なんて話していたら、

「魔法少女ものではよくあるパターンですよね」

不意の声に思わず身構えたけど、そこにいたのは…：

「あらサファイアちゃん！」

「昨晩ぶりです、姉さん」

もう一本のステッキ、サファイアだった。

「ね、姉さん？」

イリヤが少し戸惑ったような声を上げる。

うん、ステッキに姉妹とかあるとか私もよく分かんない。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「改めまして、サファイアと申します」

場所を屋上に移して、改めて自己紹介する。

「こちら私の新しいマスターのイリヤさんです。そして隣にいらっしゃるのが…」

「エールよ。イリヤの姉」

「姉がお世話をなつております」

「こちらこそ、昨日はありがとね、お陰で助かった。…この礼儀正しさの千分の一でもルビーが持つていれば良かつたんだけどね〜」

落差が激しいので、つい愚痴つてしまつた。

「同感です。同じ姉という立場でも、姉さんとエールさんでは天と地の差があると思われます」

「おお、話せる。同士だ。」

「そう仰りましても。私達は姉妹機ですし、作つた時にそれぞれ偏つてしまつたのでは？サファイアちゃんはあまり感情を表に出しませんから」

「それ最悪ね、訴訟ものだわ……。ところで、あの子はなんなの？」

この際なので、なにか情報を引き出せないかと思つて聞いてみた。

「美遊様ですね、私の新しいマスターです。姉さんと別れた後、ルヴィア様を撒いている間に見つけました」

「さつすがサファイアちゃんです、可愛い子を見つけましたね。おまけにいきなりカード使えるなんてもうスペック高過ぎです！」

あ、カードといえば：

「ねえルビー？ 私達、カードにあんな使い道があるなんて聞いてなかつたんだけど？」

「オイ、どジト目で見てみる。

「あれ、姉さんもしかして…。まだクラスカードの事を説明していないかつたのですか」

「あ、アハハハ…そういうえば、クラスカードについては、詳細を話していませんでしたね。ルビーちゃん反省です☆」

などと、全く反省してなさそうに言う。

「…はあ。それで？ アレがカードの本来の使い方なの？」

「いいえ。先に回収された二枚のカードを魔術協会が解析したのですが、高度な魔術理論で作られたものらしく、英靈の座にアクセスする事が出来る、という事が分かつただけでした。

今の所、私達ステッキがカードを介して座にアクセスし、カードに対応した英靈の宝具を一時的に具現化させていますが、本来の使い方は不明です」

サファイアが説明してくれたけど、昨日のやりとりから分かる事以上は分からぬみたいだつた。

「なるほどね。ま、ステッキ作った人じやないなら、それなしじゃ使えないものを作るはずはないし、カードには他に正しい使い方があると思ってた方がいいかな。…イリヤ、大丈夫？」

ふと見てみると、イリヤが頭から煙を出していた。

「うう…難し過ぎて追いつかない…。ホウグつて何？」

「要は神話や伝説の英雄が使っていた、神秘を秘めた武器ですね」
約束された勝利の剣とかがそうかな」

「…その通りです。随分理解が早いですね、エールさん」

ヤバつ。

ついうつかり喋り過ぎてしまい、サファイアから疑惑の目を向けられた。

「ま、まあ英靈云々については、一回凛から簡単には説明されたし。……で、タベ戦つたのは、そのカードの英靈なの？」

「…まあいいでしよう。はい、その通りです。アレも英靈の力の一部。英靈そのものと言つて良いでしよう」

とりあえず流してくれたようで、また解説に戻つてくれた。

「ただ、色々変質しているようで、理性が吹つ飛んでるみたいですねー。アレを倒したら、カードゲットです」

「つて、あと何枚あるの…？」

…危なつ。そういうえば枚数はまだ聞いてなかつた。イリヤナイス。聖杯戦争の知識から、勝手に7枚と考えていたので、ボロが出る前に聞けてホッとした。

「全部で7枚です。うち回収済みなのは、イリヤさんの持つ『アーチャー』と

「美遊様の持つ『ランサー』と、昨晩回収した『ライダー』の3枚です」

「つまりあと4枚。先が思いやられるわ」

「うう、そんなにあるんだ…」

「大丈夫ですイリヤさん！ 何の為に私達がいると思つてているんですか

？！」

不安がるイリヤを、ルビーが励ます。

「私達も全力でサポートします。ですので…」

サファイアもそういうと、イリヤの目の前に移動し、

「どうかこれからも、美遊様とカード回収を「サファイア」…美遊様」

言葉の途中で、美遊が屋上にやつてきた。

「あまり外に出ないで」

「申し訳ありません。イリヤさんにご挨拶をと思いまして」

そんなやり取りをしながら戻つていく二人に、

「あ、あの…！」

イリヤが話しかけようとしたけど、途中でやめてしまい、そのまま美遊達は屋上をあとにした。

「なんか話しかけづらい雰囲気でしたね～」

「いい加減大河も戻つてくるし、私達も戻りましょう」

あの子の日……やつぱり気になる…。

「エール side out」

「イリヤ side」

私達が教室に戻った後、授業が始まった。

「龍子ちゃん、これ解い…ゴラア寝るなあつ！……じゃあ美遊ちゃん、これ解いてみてー。お手並み拝見しちゃおつかなー」

あてられたミユさんが答えを書き始めたんだけど、そこには見たことのないような計算がズラズラと並んでいた。

「み、美遊ちゃん？これはそんな問題じやないから、微積とか使わなくていいんだからね？」

「？」

「そんな不思議そうにされても先生が困るつ！」

な、なんかよく分かんないけど、学力はすごいみたい。

と、急にお姉ちゃんが立ち上がりつて、

「へえー、やるじやない。じゃ、私も。（やつぱり難しい方がやりがいあつて楽しいよね♪♪）

そう言うと、隣の問題を似たような計算で解いていた。

「エールちゃんまで!!だからそういうのは要らないって言つてるじゃない!!??」

「え？知つてるよ？ただ私が解きたいからこうやつてるだけ」

「うちのクラスはなんでこんな子がいっぱいいるのー!!??」

お、お姉ちゃんも出来るんだ…微積つて、確かに兄ちゃんがやつてる辺りだつて前にちらつと聞いた気がするんだけど……。

お姉ちゃんとミユさんの学力の高さが分かつた時間でした。

「自由に描いてくれていいから、人物画よろしくー！」

次の図工になると、お姉ちゃんはなんか、「せつかくだし、あの人を描いてみようかな…」って言つてすぐ真剣に描き始めていた。

「ん~…!?~す、雀花ちゃん…!?~なにを描いてるのかな~?」

見回りをしていた先生がスズカの所で立ち止まつた。

「自由に、という事だつたので、性別の壁を解体して、美少年の同性愛を表現してみました」

グツ！とサムズアップするスズカ。先生もちょっと引いてる。
あ、あはは…そう言えばスズカって、所謂”腐女子”つてやつなんだつけ。

「オオー！」

そう思つて いると、一箇所から声が上がつていた。あそこは…ミユさんの席？

「…、これは…?み、美遊ちゃん？」

「はい、形態を解体して、单一焦点による遠近法を放棄しました」
な、何を言つてるのかもはや全く分からない…！

「なんでそんなの知つてるの！キュビズムは小学校の範囲外よ外！」

「…?」

「だからそんな不思議そうにしないで…。誰か、まともなのはないの
？そだ、エールはどうだ。おーい、エールちや～ん！」

「…はい？呼びました？」

お、お姉ちゃん、今までの全く気にせず描いてたの…!?

呼ばれて初めて気づいたみたいな声を上げるお姉ちゃんに驚愕した。

「エールちゃんはどんな絵描いたら？」

「えつと、まだ細かい所が終わつてないんですけど…」

「どれどれ、つてなにこれ上手つ！もうこれで完成じゃないの？つ
ていうかこの人誰？」

うんうん。何が足りないんだろ？

お姉ちゃんの絵はそれで完成つていってもいいくらいの出来だった。

「背景に砂漠と臣下を描こうかと。あの人に相応しい風景ですから。誰か、についてですけど……私の、命の恩人です」

お姉ちゃんはそう言つて、とても大事そうにまた絵を描き始めた。方向性は違うけど、お姉ちゃんもミユさんも美術力が高かつたです。

……命の恩人って、どういう事だろ？

――――――――――――――――――――――――――――――――

「調理実習をやります！協力してハンバーグを作つてね～！」

「もう、まだ絵描き終わつてないのに……」

「ま、まあまあお姉ちゃん。絵は後でも描けるし、ね？」

「ああいうのは勢いが大事なの！（というか、半端にするとか恐れ多いにも程があるわ）」

不満そうにしているお姉ちゃんを宥めて、ハンバーグ作りを始める。

……そういえば、お姉ちゃんがこんなに何かに拘るのって、珍しいかも。

そんな風に思つていると、またミユさんの班でどよめきが起こつた。

「……これは!?一体!?？」

ミユさんが作つたのは、何と食事一食丸ごとだつた。

「何か間違つていたでしようか？」

「小学校の調理実習でこんな手の込んだ料理は作らないっての！つか、フライパン一つでどうやつたの!?？」

先生の言う通りです。もう下手したらセラ達に並ぶんじゃ…。「どれどれ……！こ、この味は!?？」

あ、いつのまにかお姉ちゃんが味見してた。お兄ちゃんとセラに教

えてもらつてゐからちよつと料理にうるさいって言つてたつけ。

でも何であんなに驚いてるんだろう?

「おかわり♪」

「ちよつと待て～い！奈々亀ちゃんはなにもう食べてんのよ！全くもう……」

そんな事を考へてゐる内に、先生まで料理に手を出して、

「うんめ～♪美遊ちゃんおかわり♪♪」

「先生うるさいです」

……か、完璧超人……!!?

＼イリヤ side out／

＼エール side ／

……あの味は、間違ひなくあいつの料理…。でも、どうして…？
「おーい、エール姉。どうかしたのか？」

「え？…いや、何でもない」

私が美遊の料理について考へていたら、雀花が話しかけてきた。
「つていうか、なんでクラス…いえ、学年の大半が私の事『エール姉』つ
て呼ぶ訛？」

話を誤魔化しつつ、気になつていて事を聞いてみた。

時々『エール姐』に聞こえてくるのが余計に気になる。

「いや～、だつてなんか、同じ年っぽくないだろエール姉は」

「うんうん、しつかり者のお姉ちゃんつて感じだよね、エールちゃん
は」

まあ、実際精神年齢は上な訛だけど…割と精神が身体に引っ張られて
るから、そつはつきりと言わると、少し傷付くような…

「つと、イリヤ、ちよつとこつち来い」

「え？なになに？」

私が地味に凹んでゐる間に、イリヤが呼ばれていた。

「このままだと、エール姉以外全員あの転校生にやられっぱなしだ。

せめて50m走ぐらいは勝ちたいよな」

「うんうん、イリヤの脚だけが、私達の最後の希望」

…なるほど、そういう事ね。

なんで私は別枠なのかはまた傷つきそうだから流すけど、気持ちは分からなくもない。

「はーい、次のグループ準備して！」

そして始まつた50m走。

都合良くイリヤと美遊は一緒に走るから、勝敗は分かりやすい。

「イリヤ～、しつかりねー！」

勝ち負けはともかくとして、とりあえずイリヤを応援しておく。

「それじゃ行くわよ～。よーい」

——ダツ！

旗が振り上げられると同時に、二人が走り出す。初めは互角の勝負だつたけれど……

「うう…」

「もう…よしよし、分かったからもう落ち込まないの」

「いつまでいじけるんですか～？」

放課後。公園のベンチで私の膝の上に顔を伏せるイリヤを撫でつつ慰める。

あの後、美遊は終盤に更に加速して、そのままイリヤを追い越して小学生としてあり得ないレベルのタイムでゴールした。

「べ、別にいじけてないけど…ただちょっと才能の壁つてやつを見せつけられたっていうか……」

「…はあ。まあ気持ちちは分かるけど……」

引きずり過ぎるのも良くないんだけどなあ…

「もう日も落ちそうですし、帰りましょうよ～、ね？」

空を見てみると、ルビーの言う通りもう紅く染まつっていた。

「ほら、行きましょ」

「うん…」

ようやくイリヤも起き上がり、帰ろうとしたところで、

「何してるの？」

「ふえ？」

イリヤを凹ませた張本人が現れた。

「私は、得意の50m走で美遊に負けて凹んでたイリヤを慰めてただけだけど？ 美遊こそ、こんな所にどうしたの？」

私がそう聞くと、

「……一つ、聞きたい事があつたから」

「聞きたい事？」

まだろくに話してもいなのに何が聞きたいのかしら。

「貴女達は、どうしてカード回収をしているの？」

……そうきたか。

確かに、私達には一見して手伝う理由がない。聞きたくなるのも当然といったところね。

「大元を言うなら、凜から逃げたルビーがイリヤをマスターにしたせいで巻き込まれたのが理由。まあ、妹ひとりで戦わせる気はないから、私も手伝つてる訳だけど」

「……つ、そう。じやあ、貴女はどうして戦うの？ 巷き込まれただけの貴女には、戦う義務も責任もない。本気で拒めば、ルビー達も諦めたはず」

美遊は私の答えに一瞬表情を変えたけど、すぐに戻つてイリヤに目線を向ける。

……いわれてみれば、私もどうして戦う気になつたのかは聞いてなかつた。

「えつと、その…じ、実を言うとね？ こういう事に、少しだけ憧れてたんだ。ほら、これってゲームとかみたいな状況じやない？」

「ゲーム？」

美遊はイリヤの言葉を、怪訝そうに繰り返す。

「うん。魔法を使って戦うとか、冗談みたいな話だけど、ちょっとワク

ワクしあちやうつていうか…。せつかくだから、このカード回収も楽し
んじやおつかなうなんて「もういい」え？」

もう聞く価値はないとも言うように、途中で話を遮る美遊。

「貴女にとつて、これはゲームと同じ楽しい遊びみたいなものなんで
しよう？」

「あ、あの、ミユさん？」

そう言つて立ち去ろうとする美遊を、イリヤが呼び止める。

「……貴女は戦わなくていい。カード回収は、私だけでやる」

……行つちやつたか。

流石に今回ばかりは弁護のしようがないかな。

「な、なんで怒つてるのかな…」

「よく分かりませんが、地雷踏んじやつたみたいですね」

わけが分からず呆然としているイリヤ。

：聞かなきや良かつたと言うべきか、今聞けて良かつたと思うべき
か。イリヤが戦う事については、また今度じつくり話した方が良さそ
うね。

＼エール s i d e o u t ／

＼イリヤ s i d e ／

「大体、巻き込まれたのはあの子も一緒に、なんであんなに言われ
なきや…」

分からない。なんであんな事言われなきやいけないのか全つ然分
からない！お姉ちゃんはなんか気付いたみたいだけど教えてくれな
そうだし…：

そんな事を考えてる内に家に着いた。

あれ、セラが外に出てる。

「ただいま、セラ」

「ただいま」

「あ、お帰りなさい、イリヤさん、エールさん」

「どうしたの？」

この時間帯にセラが外に出ているのは珍しいから、どうしたのか聞いてみた。

「え？」

そう言つてセラが指を指した方を見てみたら、

「な……大きいやつ!」

モーリー、朝日

「今朝、突然工事が始まつたと思つたら、あつという間

•
•
•

一〇四

不意にお姉ちゃんが声を上げたので、目線を屋敷から離すと、つきつき色々言われたミユさんがいた。

卷之三

邸に入ろうとした。

……美遊、ここって、もしかしなくても貴女の家?」

「まあ、そんな感じ

ギイ、と門が閉じる。

お二人ともお友達ですか？

二つこそう答えるが茆のやん。

「あ、あははは…」

「いや、まさか家の前で会うとは」

「そうだね、びつくりしたよ」

夕ご飯を食べて、お風呂に入る私達。

ホントに魔法少女ものみたいな展開になつてきた…

「なんとも間が悪いというか、カツコつかないですね」

「あはは…確かに。まあでも、あそこで会わなくとも、今夜また、会えるんだしね」

「そうですね」

あんな事言われちやつたけど、上手くやつていけるのかな。

……凛さん達みたいにはならないようにしておこう。

卷之三

そして深夜零時前。私達は橋の近くの公園に集まつた。

「油断しないでね、イリヤ。敵とルヴィア、どちらも警戒するのよ」

あ～、えつと……

「お二人のケンカに巻き込まないで欲しいですね」

「全くよ。というか、二人のケンカがそもそもその原因じゃない」
おつしやる通りです……。

私達がそんな会話ををしてい

「ミユ、速攻ですわ。開始と同時に距離を詰め、出来るだけ遠坂凛を巻トオサカリソ

「後半以外は了解です」

「殺人の指示はござる遠慮ください」

……ど、どうでもどうでした…。

「なんでこの二人に一緒に仕事をやらせようなんて考えたのかしら、時計塔は」

「知るかそんな事……行くわよ、 3、 2、 1…」

「離界！」

前回よりどこか殺伐とした空氣の中、一枚目のカード回収が始まつたのでした……。

} イリヤ

s
i
d
e

o
u
t
{

第5話 敗北、そして特訓

↙エール side ↘

：見事に負けたわね。

深夜零時過ぎ。私達はボロボロになつて帰つてきた。

「いや～、歴史的大敗つてヤツですね～」

「な、なんだつたのよあの敵は…」

凛とルビーがそんなやり取りをしていると、

「どういう事ですの!!? カレイドの魔法少女は無敵なのではなくて!!

?

ルヴィアが逆ギレしてサファイアを引っ張つていた。

「私に当たるのはおやめください、ルヴィア様」

うん、あれはないわ。八つ当たりにも程がある。

「ルビーサミング!」「セイツ!」

私が止めようとルヴィアの腹にエルボーを決めたのと、ルビーが目潰しをしたのはほぼ同時だつた。

「サファイアちゃんを苛める人は許しませんよ～!」

「…意外ね、貴女も姉らしい所あるじゃない、ルビー? ちょっと見直しだわ」

痛みに悶絶するルヴィアを前に胸を張るルビーに、少しだけ感心した。

「フツフツフ：私だつてやる時はやるんですからね～！つと、それはさておき、魔法少女が無敵なんて慢心にも程があります！まあ魔術師相手なら概ね事実と言えますが、英靈が相手ともなれば、相性の悪い敵も当然います！」

「で、アイツはその相性の悪い敵、つて訳ね」

少し反り返つた後にそう告げるルビー。

「アレつて相性で済ませていいレベル？魔力砲の出力はステッキ以上、無数の砲台。対策しなきやならない事が山積みよ」

境界面に飛んだ私達を待ち受けていたのは、無数の魔力砲台。

そこから放たれる魔力砲はルビーの障壁を容易く突破した。おまけに……

「あの魔力反射平面も問題よ。あれをどうにかしない事には攻撃しようがない」

そうなのだ。美遊の全力の魔力砲すら簡単に弾くシールド。

あれがある限り、私達に勝機はない。

「……ねえ、カレイドって空飛べたりしないの？ 反射平面も砲台も固定されてたみたいだし、有効範囲外から攻められればなんとかなりそうに思えたんだけど」

凛の指摘した課題に、私なりの考えを出してみた。

「ん~、出来るつちや出来るけど、練習もなしにいきなり飛べるとは「そつかー、飛んじやえば良かつたんだね~」へ？」

イリヤを見てみたら、当然のようにあつさりと宙に浮いていた。

「ちよ、なんでいきなり飛べてるのよ！」

「すごいですよイリヤさん！ 高度な飛行をこんなにサラッと！」「……凛とルビーの反応からして、簡単な訳ではないのね。

「そ、そんなにすごい事なの？」

イリヤも難しいとは感じていないらしく、不思議そうにしている。

「強固なイメージがなければ浮く事すら難しいのに、一体どうして…」珍しくサファニアまで驚いているけど…イメージ、ね。道理で。「どうしてと言われても…魔法少女つて、飛ぶものでしょ？」

「な、なんて頼もしい思い込み!!?」

ズガーン！と背景に落雷を幻視する程衝撃を受けている魔術師二人。

そう。イリヤには既に魔法少女＝飛べる、という図式が出来上がっている。魔術理論にも一般常識にも囚われないイリヤの小学生らしい想像力なら、空を飛ぶのもそう難しい事じやない。

「さてと、これでこつちは問題解決だけど…美遊、貴女も飛べる？」さつきからずつと黙り込んでいる美遊に水を向けてみると、

「…………人は、飛べない…！」

あ、やっぱり理論派だった。

数式とか無駄に出来てたから逆にこういうのは苦手な気はしてたのよね。

と、不意に美遊の後ろからルヴィアがマントをむんずと掴んで引きずつていった。

「まつたくなんて夢のない…そんな考えだから飛べないので！次までに飛べるように特訓して差し上げますわ！」

「……今日はここまでね。私も戦略考えとくから、また明日にしましょう」

引きずられてゆく美遊を見届けた後、私達も家に帰つていった。

「はあ……。記録で見た時は、キヤスターは大した事なさそうだったんだけどなあ」

自分の部屋に戻つてきて、ひとり呟く。

第五次の記録では、高い対魔力を持つセイバーに圧倒されたりしていたので、ル'ル'レ'カ'破戒すべき全ての符さえ気を付ければいいと思っていた。けど実際には、カレイドの障壁ではキヤスターの魔術を防ぎきれず、イリヤが飛べた事でなんとか活路が見出せた程度。

「それに、気になる事はもう一つ……」

それは、私服からパジャマに着替えた時に気づいた事。キヤスターの攻撃で受けた傷が治つている。

最初の魔力砲は障壁を貫通して届いていたし、逃げる直前に放たれた巨大な魔力砲でも、余波で多少はダメージを受けた。

小さいながらも、それなりに身体に傷が付いていたはずなのに、それが一つ残らず消えている。

……考えられるとしたら、アヴァロン全て遠き理想郷の力が発動した事だけど、本来ならそれはあり得ない。

体内に入れられた時に入つていた魔力はとつぐに切れているし、私は魔術回路を開いていない。魔力がない以上、いかに全て遠き理想郷アヴァロンといえど治癒の力は発動できない。

でも、ステッキも使つていない私には、他に思い当たるものがない。

「……まさか」

最悪の想像が頭をよぎった。

……あの場に、セイバーもいた……？

それなら、全て遠き理想郷は活性化するし、あれだけ魔力に満ちた空間なら、大魔力から取り込んで軽い傷ぐらいなら治せるとと思う。でも、そうなると……

「キヤスターを倒した後、連戦でセイバーとやり合う必要がある、か」

……私も、出来るだけの事はしないといけない、って事かな。

もとより、イリヤを守る為なら使える物はなんでも使うと決めている。

私は覚悟を決めて、記録の中で飽きる程聞いたあの言葉を呟く。

〔トレー・ス・オン
同調、開始〕

↙エール side out ↘

↙イリヤ

s i d e

↙

「さてと、この辺でいいかな。イリヤ、特訓するよ」

「はーい」

「それでは行きましょう！コンパクトフルオープン！境界回廊最大展開！」

キヤスター（お姉ちゃん命名）にやられた次の日、私達は、夜の戦いに備えて、森の中の開けたところで特訓する事にしました。
：お姉ちゃんの背負つてるものが何なのか気になる。

「つと、そだ。お姉ちゃん、ルビー、コレ使つてみてもいいかな？」

そう言つて、私はリンさんから預かってきたモノを取り出す。

「クラスカードですか？いいですよ」

「一回もやらないので不安だしね、やつてみて？」

二人にOKを貰つた私は張り切つて、

「アーチャーつて言うぐらいだから、弓だよね？どんなのが出てくる

のかな？よーし、**限定展開！**
インクルード

カードをルビーにかざしてそう唱えると、あつという間にルビーが弓に姿を変えた。

「おおっ！ホントに出た～！これ使えば勝てるかな？お姉ちゃん」「…（あの黒弓…やつぱりアーチャーはアイツなのね：ん？）ねえイリヤ、知つてる？弓つてね、矢がないと殆ど役に立たないんだよ？」

「ふえ？」

お姉ちゃんに言われてふと手元を見てみる。

「あ、あれ？矢がないつ！ルビー、矢は？」

「ありませんよー」

そんな素つ気なく？

「なにそれ～？全然意味ないよこれー！」

「（まあ、アーチャーの宝具はアレなわけだから、使えるはずないとは思つてたけど）…しようがないじゃない、無い物ねだりしても始まらないし。地道にコツコツやつてしましょ？」

そう言つてお姉ちゃんは、手に持つていたピンポン球を私に投げてきた。

「…そうですね～、一歩ずつやつていきましょー！これでどうするんです？」

あ、ルビーが元に戻つてる。

「決まつてるでしょ？キヤスター対策。ルビー、顔以外の物理保護のレベルを落としなさい。ボールが当たつて少し痛みを感じるくらいに。私がひたすら打ちまくるから、イリヤはそれを全部避けて」

ルビーの質問に、お姉ちゃんはいたずらっぽい笑みを浮かべてそう言つた。

「え？ち、ちよつと待つて～つて危なつ？」

いきなりボールが私の方に飛んできたので慌てて避ける。

「敵は待つてくれない。どんどんいくよ！全部躊しきるか接近して私は一撃入れられたら終わりね！」

いつの間にかお姉ちゃんの周りにはボールの入った箱がいくつも置かれていて、動き回りながらラケットでボールを打ち出してきた。

「打ち出すポイントを複数箇所用意してキヤスターの砲台を再現しますね、中々本格的です！」

お姉ちゃんは私の避けた先を予測してるみたいで、どんなに動き回つても逃げ切れない。

「こんなのが全部避けるとか絶対ムリだよね!?」ってイタアツ!?「隙だらけよ！止まらない！」

痛みでつい動きを止めると、一気にボールが集中する。

「イヽヤヽツ！」

な、なんで今回こんなスバルタなの？!

「イリヤ side out」

「エール

s i d e

out

「そろそろ休憩にしようか。イリヤ、ボール拾うよ」

「うう、疲れたよ……」

「やつと終わりですか、やれやれです」

箱で用意していたボールを打ち尽くしたので、全部回収してから私達は休憩に入った。

「だんだん動きは良くなってるけど、動き出しがまだ少し遅いかな。打たれてからじゃなくて、私の手とか目の動きである程度先読みしないとね。キヤスターの砲台なら、自分にロックオンしてるのは分かるから、それを目印に動くといいと思う」

「…ウン、ソウダネ…」

あら、燃え尽きてる。

「いや、中々スバルタでしたね。ここまでする必要ありました？」

愉快そうにしながらルビーが聞いてきた。

まあ、確かにキヤスターだけならここまで徹底する事もないんだけどね：

「キヤスター戦は極力無傷かつ速攻で終わらせた……つ!? 美遊？」

急に気配を感じて空を見上げた直後、もの凄い勢いで美遊が墮ちてきた。

「…全魔力を物理保護に変換しました。ご無事ですか美遊様」

「な、なんとか…」

落ちた衝撃で出来たクレーターから、美遊がサファイアを杖代わりにして出てきた。

「み、ミユさん？ なんで空から…？」

「……」

「ルヴィニア様にヘリから突き落とされました」

……後でルヴィニアには説教が必要ね。

「どうで、お一方はここで何を？」

「ん？ 飛行訓練。イリヤ飛んで～」

「…はい」

ちよつと嫌そうな声を上げつつ飛び上がったイリヤに、不意打ちで一球投げてみる。

「ちよ、いきなり！？せめて予告ぐらいしても…」

「つと、こんな感じで飛んでるイリヤにボールを打ちまくつてキャスター対策してた。イリヤ～、もういいよ～！…？どうかした？ 美遊」イリヤを下ろして振り返ると、美遊がどこか呆然とした様子で立ち尽くしていた。

「……飛んでる」

「はい、ごく自然に飛んでらっしゃいます。」

「……」

……まったく、可愛い所もあるじゃない。

私達の前で困ったようにしている美遊を見て、つい微笑ましい気持ちになる。

ふと見ると、イリヤも気付いたのか私の方を見ていたので頷くと、美遊に近づいていく。

「あ、あのねミユさん。一緒に練習しない？ 飛べないと戦えないし、困った時はお互い様でしょ？だから、ね？」

そう言われた美遊はしばし躊躇つたあと、

「…その、教えて欲しい。飛び方…」

頬を赤らめながら上目遣いにそう言う美遊に、イリヤは花咲くよう
に笑みを浮かべる。

「うんっ！」

…少し前進したかな。このまま和解出来たら最高なんだけど…。

「じゃあまずは、エイツて感じで！」

ズコツ。

イリヤが宙に舞いながらそんな事を言つているのを聞いて、思わず
ずつこける。

美遊は一瞬「え？」みたいな顔をしつつ、素直に跳んでみていたけ
ど、当然飛べない。

「ええっと、じゃあ「ストップ」はい？」

実際に飛べるイリヤに任せようと思つてたけど、このままではどう
にもならなそうだったので、一旦止めた。

「イリヤ、それじやダメ。まだ美遊は「人は飛べない」って思つてるか
ら、飛べる前提のイメージじやどうにもならないよ」

「あ、ええっと…」

じゃあどうしよう、とイリヤが私を見てきた時、サファイアが意見
を出してきた。

「昨晚イリヤ様は、『魔法少女は飛ぶもの』と仰いました。そのイメー
ジの元になつたものを教えて頂ければ、何かヒントになるかもしま
せん」

イリヤのイメージの元…あまり役に立つとは思えないけど、他に
考がある訳でもなし、ダメ元でやつてみるか。

「オツケー分かつた。イリヤ、私これ片付けてから行くから、先帰つて
準備しといて」

「うん」

と、先に帰るのはいいけど、飛んで行つてしまつたので美遊が置い
てけぼりになつてしまつた。

「はあ、やっぱり飛ぶのが楽しいのかしら。ごめん、ちょっと待つて

て

私がそう言つたきり、沈黙が続く。
…………き、気まずい。

「エールスファイール」

「うん？」

あまりに気まずいので、私が何か声をかけようとした時、美遊の方から話しかけてきた。

「貴女はどうしてカード回収をしているの？」

そういうえば、イリヤのを聞いてる途中で止めちゃつたから、私のはちゃんとは聞いてないんだつけ。

「あー、そうだ。あの時はごめんなさいね、あの子、まだ巻き込まれた感が強くて受け止めきれてないから。きつかけがあれば、ちゃんと向き合つて考えられると思うから、待つてあげて？……と、今は私の話だつた。私がカード回収を手伝う理由はそれこそ単純」

私は美遊の目の前に移動して、

「……妹が危ない事をしてるのよ？姉の私が知らないフリして放つておける訳ないじゃない」

「つ!!？」

笑つてそう言うと、美遊はひどく驚いたように目を見開いた。

「エール s i d e o u t」

「美遊 s i d e」

……やつぱりこの人、お兄ちゃんに似てる。

エールスファイールへの質問の後、彼女達の家に向かう途中、私はそう思つた。

性別も年齢も違うけれど、妹を放つておけないと笑つた彼女の顔が、別れ際のお兄ちゃんの顔と重なる。

……お兄ちゃん……。

「美遊？どうかした？」

「え？」

ふと見ると、エールスフイールが心配そうにこちらの顔を覗き込んでいた。

私がなんでもないと首を振ると、

「…ねえ、美遊？ 何も一人で抱え込む必要は無いんだからね？ 貴女が周りを頼る事は、別に悪いことじゃない」

「!? それって、どういう…？」

まるで私の事情を知っているかのような物言いに、思わず顔を向ける。

「…さてと、シリアルスはここまでにして、家に入りましょ？ 取り敢えずイリヤのイメージの元を見るんでしょ？ あまり役に立つとは思えないけど」

詳しく述べて思つたけど、はぐらかされてしまった。

でも、実際今はそちらの方が大事なので家に入ったのだけど……。

「こ、コレは…!?」

「うん、私の魔法少女イメージの大元、の一つかな」

イリヤスフイールが用意していたのは、魔法少女を題材としたアニメだつた。確かにアニメの魔法少女は飛行していたのだけど……。

「航空力学はおろか、重力も慣性も作用反作用も無視したデタラメな動き……!?」

「あらら、やつぱりそうなつちやつたか。予想以上だつたけど。アニメにそこまで求めちゃダメなんだけどなあ…」

戦慄している私に、エールスフイールが突っ込んでいる。

「このアニメを全部観れば、美遊様も飛べるようになるのでしょうか」「……多分、無理。コレを観ても、具体的なイメージには繋がらない。浮力で飛んでいるようには見えないから、揚力で飛んでいると考えても……ブツブツ…」

サファイアの質問に首を振りつつ、それでも何とかイメージしようとしたりけど、計算が合わないのでうまくいかない。と、

「そこまでっ！」 「ルビー・デコピン！」

「はうつ…？」

エールスファイールの声と同時に、ルビーが私の額にデコピングを食らわせてきた。

「な、何を…」

「まったく…美遊は頭がいい分理屈にとらわれ過ぎてるのよ」

「そうです！ イリヤさんのような過程をすつ飛ばして結果だけをイメージするぐらいの能天氣さが、魔法少女には丁度いいんです！」

「なんか私酷い言われようなんだけど！？？」

途中入ったイリヤスファイールの抗議がスルーされて、言葉が続く。『美遊さんにはこの言葉を送りましょう。『人が空想できる事全ては、起こり得る魔法事象』：私達の創造主たる魔法使いの言葉です』

「…物理事象じゃなくて？」

「同じことです！」

私の疑問に対し、ルビーはそう答える。

「まあ、それはそれとして…空想って言うのは、大げさに言えば人の願いみたいなもの。そこに具体的な過程はないけれど、こうであつて欲しいと結果を願う…。イメージなんて、そんなものでいいの」

…すごく、実感が湧いた。彼女の言っている事は、私自身にも当てはまるものがあるから。

「…なんとなく、考え方は分かつた気がする」

私が立ち上がると、

「そう？ なら良かつた。あまり時間もないけど、頑張つてね」

「ミユさんなら出来るよ、絶対！」

二人はそう言ってくれた。

「…じやあ、また」

何も言わずに帰るのも気まずいので、一言告げて扉を閉めた。

（美遊 side out）

（エール side out）

「戦うな、なんて言われた昨日に比べたら、前進したのかな…？」

美遊が帰った後、イリヤがそんな事を呟いた。

「そうですね。あとはお一人がうまく連携出来れば言う事なしなんですけど…」

「ま、成るように成る、としか言えないかな。頑張りましょ？」

—————

夜。橋の下の公園に、私達は再び集まつた。

「複雑な事してもしようがないから、役割を単純にしたわ。小回りが利くイリヤにキャスターを引き付ける囮役、突破力のある美遊に本命の攻撃を担当してもらう。エールは私達と行動して、二人のフォローをして」

「「了解」」

凛の指示に、私達が答える。

「もう失敗は許されない。行くわよ！」

こうして、私達の第1ラウンドリターンマッチが始まつた。
⋮何が起ころうと、イリヤ達は死なせない！

エール side out

第6話 妹を守るのは姉の役目

↙エール side ↘

「美遊！」

ひとりキヤスターめがけて飛び出していった美遊に、思わず叫ぶ。
あれじや間に合わない……だつたら！

「イリヤ！」

「うん！」

私の呼びかけに応えて、イリヤが魔力砲を美遊に向けて放つ。

「美遊（さん）！乗つて！」

美遊は一瞬目を見開いた後、魔力砲に乗つて加速し、

「刺し穿つ死棘の槍！」

キヤスターの魔術が発動するより早く、キヤスターを貫いた。

……はあ。なんとかなったわね……。

キヤスターを撃破して、ひとまずホッと一息つく。

最初の作戦はキヤスターの転移魔術で躰されたけど、美遊の機転でイリヤが反射平面を利用した広範囲攻撃で足止めし、美遊が魔力砲で吹つ飛ばした。

墜落地にすぐさま凜とルヴィアが駆け寄り、炎色の荒嵐ローターシュトウルムで倒したかに見えたけど、転移で離脱したキヤスターが空間ごと焼き払う魔術を展開して、今のやり取りに至る。

「美遊（ミユ）に向けて魔力砲を撃つなんて、なんて危険なマネを……」「だ、だつて、出来ると思つたんだもくん！」

ふと見ると、ルヴィアがイリヤの頭をグリグリと締め付けていた。「指示を出したのは私よ。というか、美遊にパラシユートなしでスライディングさせた人がなに偉そうな事言つてるのよ」

取り敢えず止めようと思い、昼間の件を出して話を逸らす。「う……そ、それは美遊（ミユ）が飛べるようになると……」

「言い訳無用。：イリヤ、美遊の迎えに行つてあげて？こつちは私が

まとめとくから」

「……うん！」

ルヴィアが怯んだ隙にイリヤを逃し、美遊のもとへ向かわせる。
「まつたく、二枚目にしてコレとか、先が思いやられるわね。……にし
ても、カード回収したってのに空間の崩壊が遅くない？」

凛がため息をついた後、不思議そうに辺りを見回す。

「そりいえばそうですわね。一体なぜ……？」

……そうだった。

まだ終わりじゃない。むしろ、アレに比べたらキャスターなんて前
座みたいなもの。

「呑気な事言つてる場合じゃないよ、二人とも。本番はここか……つ
？」

二人に警戒を促そうとした直後、背後から何かが迫つてきた。

「凛！ルヴィア！」

予想通り、襲つてきたのはセイバーの剣撃だつた。

私は間一髪で躲したけど、凛とルヴィアは避けきれなかつたらし
く、側で倒れているのが見えた。

「セイバーはどこに……ガハッ!!？」

振り返つてセイバーを探そうとしたら、腹部に強い衝撃を受けた。

セイバーの体勢をみると、蹴り飛ばされたらしい。

そのまま私は橋に激突して、ようやく止まつた。

「う……ぐ……！」

「お姉ちゃん!!?」

……遠くでイリヤの声が聞こえた気がした。

……二人とも……無事で……い……て……

二人の無事を祈りながら、私の意識は途切れた……。

↙エール side out ↘

↙イリヤ side ↘

「え!? なに!?」

私がミユさんと合流した後、急に後ろから何かが爆発したような音が聞こえてきた。

あつちつて確か…お姉ちゃん達のいる方!?

「行こう! ミユさん!」

「うん!」

気になつて飛んでいく途中、煙の中から何かが飛び出てきて、橋に激突したのが見えた。

あれつて……

「お姉ちゃん!?

「待つて、イリヤスフィール」

心配で急いで向かおうとしたけど、ミユさんに引き止められた。

「でも! お姉ちゃんが「あれを見て」え?」

ミユさんが指していたのは、お姉ちゃんがいた煙の中。そこにうつすらと浮かんで見えたのは……

「……最悪の事態です」

「ありえるの? こんなこと……」

「完全に想定外…。しかし、現実に起こつてしましました。…二人目の、敵…」

鎧に身を包み、黒い剣を持つた騎士の姿だった。

「エールスファイールの所に行つても、彼女を戦いに巻き込んでしまうし、今そばにいるルヴィアさん達の安全を確保しないといけない。……気持ちは分かるけど、抑えて」

「…………」

本当に申し訳なさそうにするミユさんに、私はなにも言えなくなつてしまつた。

ど、どうしたらいいの……?

（イリヤ side out）

♪美遊 side ♪

こ、ここまで強いなんて……

目の前の光景に、私は恐怖を覚えた。

地面は抉れ、瓦礫がそこかしこに散らばっている。ここにあつた全てが、もはや一切原形を留めていない。

「り、リンさん……？ルヴィアさん、ルビー！サファイア!!？お姉ちゃん……みんな、どこ行っちゃったの……？」

イリヤスフイールが、絶望したようにその場で膝をつく。

「私ならここだよ、イリヤ」

背後から声がした。私達が振り向くと、

「お待たせ、一人とも。……無事でいてくれて、本当に良かつた」
エールスフイールがそう言つて微笑んだ。

「お姉ちゃん!!？」

「おつと。……よしよし、怖かつたよね。よく頑張った」

彼女は飛びつくイリヤスフイールを優しく抱きとめ、その頭を撫でる。

「うう、お姉ちゃん……ルビーが、凛さんがあ……！」

「凛とルビー？そいいえれば目が覚めてから見てないけど……。美遊、場所を変えるよ。橋の方には瓦礫も多いから隠れやすいと思う」「…わかった」

かなりの勢いで橋に激突したはずなのに平気そうなのは気になつたけど、彼女の言う事も正しいので、一旦瓦礫の陰に身を隠した。

「……さて、と。イリヤ、少しは落ち着いた？」

「……うん」

「よろしい。……それじゃ美遊、私が氣絶していた間の事を教えてくれる？ものすごい衝撃で叩き起^こされたと思つたらこの有様で、正直何が何だかさっぱりなんだけど」

イリヤスファイールを気遣いながら、私に状況を聞いてきた。

「……初めは私達で黒化英靈と戦つたんだけど、魔力の霧に攻撃が阻まれて、逆に向こうは私達の防御を貫通する斬撃を飛ばしてきた……正直、キヤスターの時以上に歯が立たなかつた。だから、回復したルヴィアさん達にステッキを預けて代わりに戦つてもらつたんだけど……それでも敵わなくて、宝具の直撃を受けて……。宝具の真名は約束された勝利の剣……あの英靈は、アーサー王その人だつた」

私がそう説明すると、

「……大体分かつた。中々に最悪の状況ね。……イリヤ、美遊。これからどうするか決めたから、聞いて。二人は今から凜達を探し出して合流、ステッキで脱出の準備をして」

「で、でも……リンさん達は……」

イリヤスファイールが頃垂れてそう言う。

私も、あのタイミングで逃げられたとは思えない。

……一人は？

「大丈夫。あの二人は簡単にやられたりしない。それに、ステッキがないと私達は帰れないんだから、信じるしかない」

「ちよつと待つて。一人は……って、貴女はどうするつもり？」

私が疑問に思つた事を聞くと、

「……探してゐる間何もしてこないとは思えないからね。私はセイバーの足止めをする」

そんな、無謀な事を言い出した。

「!?無茶すぎる！ステッキを使つても歯が立たないのに、どうやつて!?？」

「無理だよお姉ちゃん！」

私達は反対したけれど、彼女は首を横に振る。

「相手がアーサー王なら、私がそばにいればすぐにバレる。他に手はないの。……それに、何も生身で立ち向かうなんて言つてないよ？」

「え？ お姉ちゃん？」

よく分からぬ事を言いながら、彼女はイリヤスフイールの持つていた『アーチャー』のカードを手に取る。

「貴女、何を……！」

「私の仮説が正しければ、このカードはセイバーと戦うだけの力がある。これを使えば、時間稼ぎぐらいならできるはず」「どうしても！ 危険な事に変わりは「だからこそ、だよ」……え？」

なおも食い下がる私に、彼女は告げる。

「ここにいれば、誰だつて危険だよ？ 美遊も、私も…もちろん、イリヤだつて。でも、だからこそ私は戦わなくちゃいけない。…お姉ちゃんだから、妹の事ぐらい、ちゃんと守らないとね」

「!!？」

…似てる、なんてものじやなかつた。

私の中で、お兄ちゃんと彼女の姿が完全に重なつた。

「そろそろ気付く頃ね。美遊、イリヤの事お願ひね」

「お姉ちゃん!!？」

止める暇もなく飛び出して行つてしまつた彼女を追つて私達も物陰から出ると、今まさに黒化英靈が斬りかかろうとしているところだつた。

最悪の事態を想像したイリヤスフイールが目を閉じかけた時、
〔夢幻召喚!
インストール〕

彼女がそう叫ぶと同時に、周囲が光に包まれる。

「あれは……」

「お姉ちゃん、なの……？」

光が消えた後、私達が見たのは…赤い外套に身を包み、双剣で黒化英靈の剣を受け止めていた彼女の姿だつた……。

「美遊 side out」

「エール side エール

「そろそろ気付く頃ね。美遊、イリヤの事お願いね」

一瞬惚けたような顔をした美遊にイリヤを預け、私は物陰から飛び出した。

アーチャー……ううん、シロウ、お願い。私に力を……二人を守る、戦う力を貸して。

そんな思いを抱きながら、私はカードを地面に置く。

セイバーがこちらに気付いたようで、こちらに向かってくる。

——ずっと考えていた。

宝石翁が作つたのでないなら、ステッキを使わずにカードの力を引き出す方法があると。

セイバーが迫り、あと一息で剣の射程に入る。

——そして、一つの仮説に辿り着いた。

カードを英靈の座にアクセスし、対応した英靈の力を対象に宿すものと仮定すれば、その対象を変える事で力の引き出し方を変えられるのではないか、と。

射程に入り、セイバーが剣を振り上げる。

——つまり、ステッキに宝具の力を宿すのではなく、私自身に英靈そのものの力を宿す。則ち、

「夢幻召喚！」
〔インストール〕

私の叫びとともに、カードが光を放ち、無力だった私に力をくれる。服装はアーチャーとよく似た赤い外套へと変化し、手には投影済みの干将・莫耶が握られる。

私はそのままセイバーの剣を受け止め、間髪いれずに蹴り飛ばす。セイバーはすぐに起き上がりつたけど、私の変化に警戒心を抱いたのか、一旦距離を置いたまま様子を見ていた。

……このまま時間を稼いでもいいけど、斬撃を飛ばされたら後ろのイリヤ達が危ない。

私は自分から接近して仕掛ける事にした。

「はあああー！」

1

左の莫耶を振り下ろすと、セイバーは容易くこれを切り上げるようにして弾き、その勢いのまま斬りかかる。

バーの右腕を狙うも、再び弾かれる。

三
れ
い
い

隙を見せる事で相手の次の手を説導し、隙を攻撃する。ヤード界隈では、アーヴィングの「アーヴィング・チャーチ」の名前で知られる。

— 体どれだけ切り結んだことだろう。

時間の感覚などどうに狂い 手に持つ双剣は何度も碎かれている
……そろそろ魔力が心許無くなつてきたかな……。

いくら負担の少ない干将・莫耶でも、数を重ねればそれなりに消費するし、全て遠き理想郷に持つていかれた分もある。

イリヤ達はまだ……アーヴィング

焦りが動きに出たのか、ほんの少し力を込め過ぎた腕が弾かれ、体ごと仰け反る。

間一髪で直接切り裂かれるのは防いだものの、踏み止まる事が出来

ずに大きく吹き飛ばされる。

「このままじゃ…投影トレース・オン、開始！」

追撃の構えを見せるセイバーの目の前に、無銘の剣を大量に突き立てる。

稼いだ時間は一秒にも満たないけど、体勢を立て直すには十分。均衡を崩された以上、短期決戦で倒す！

覚悟を決めた私は、向かってくるセイバーに向けて干将・莫耶を投げる。

当然のように弾かれるけど、気にせず更に一対投影して投擲する。「つ！」

セイバーはもう一度弾き飛ばそうとしたけど、途中で背後に迫る気配に振り向く。

そこにあるのは、さつき弾かれた干将・莫耶。

これこそが、アーチャーが考えた必殺。

互いに引き合う性質を利用して、四方を囲み逃げ場を無くし確実に敵を仕留める技。

本来ならもうひと工程あるけど、ここからはオリジナルにする。なぜなら…

「フツ！」

セイバーが魔力の霧を作り、まとめて吹き飛ばそうとしていたから。

…けどね！

「読めてんのよ！」

私がそう叫ぶと同時に、二対の双剣が爆発し、魔力の霧を消し飛ばす。

…壊れた幻想ブローカン・ファンタズム。

宝具が内包する神秘を開放し、爆発させる技。全ての宝具で出来るらしいけど、投影品を使うアーチャー以外は二度と宝具を使えなくなるとかで禁忌とされているらしい。

「I am a m t h e b o r n o f m y s w o r d
我ラが骨ボルグ子ボルグはボルグ撓ボルグれ狂ボルグう」

そのまま黒弓を投影し、アーチャー最高クラスの火力を誇る剣矢だと

どめにかかる。

これで、どう…？

一度手を止め、煙が晴れるのを待つ…。

と、突然煙が吹き飛び、私はミスを犯した事に気付かされる。

セイバーは肩の鎧が吹き飛んだだけでそこまで深い傷は負っていないようで、低く構えて剣に魔力を込めていた。

躲された…!!? しかも宝具…待たずにさつさと追撃していれば！ とにかく避け…!!? しまった!!?

射線から逃れようとした時、後ろにイリヤ達がいるのを思い出す。仮に避けられたとしても、二人が確実に巻き込まれる。

……受け止めるしか、ない。

「上等。やつてやるわ…トレー・ス・オノ同調トレー・ス・オノ開始」

私が知る中で、約束エクスカされた勝利の剣を止められる宝具は一つだけある。それを投影する為に、カードを介してアーチャーの座へとアクセスする。

あの世界で士郎が宝石剣を投影した時の応用。私の記録で座標を固定して、アーチャーの記録から情報を引き出す…！

ピシッ…

一瞬、視界がヒビ割れた…ような気がした。

でも、そんな事を気にしている時間は無い。私は一心不乱に目的の記録を探す。

……見つけた…！ あとはこの情報を私に反映させれば！

「トレー・ス・オン投影、開始」

…なんとか投影が間に合つた。完全な開放は厳しそうだけど、それで十分。

「約束エクスされた…」

セイバーが真名を開放し始める。私もそれに合わせるように、投影したばかりの宝具を構える。

「勝利の剣!!?」

「仮想宝具、人理の礎!!?」

私が盾を開いた直後、黒い極光が襲う。

「はあああああああつ!!?」

絶対に、ここで抑えてみせる！

「エール side out」

「美遊 side」

「な、何がどうなつてゐるの…？」

私の横で、イリヤスファイールが戸惑つたような声を上げる。

目の前では、黒化英靈とエールスファイールがほぼ互角の勝負を繰り広げていた。

「彼女自身が、英靈と化してゐる…？」

私が呆然と呟いてゐると、

「み、ミユさん!!?なんか来るんだけど!!?」

足下を見ると、地面を盛り上げて進むナニカがいた。

軽く怯える私達をよそに、ソレは目の前まで迫つてきて…：

「ご無事ですか美遊様!!?」

サファイアが飛び出してきた。

「さ、サファイア：無事だつたの…？」

「はい。直前に地面に穴を開けて、なんとか地下に逃れました。ル

ヴィア様達も気絶しているだけで無事です。それより、あれは一体

…」

二人が無事と聞いてホッとするとともに、戸惑うサファイアに、どう答えるべきか迷う。と、

「お姉ちゃん!!?」

イリヤスファイールの声に顔を上げると、エールスファイールが吹き飛ばされているのが見えた。

黒化英靈は追撃を仕掛けようとしたけど、彼女はどこからか取り出した無数の剣を壁代わりにした一瞬の間に立て直し、手に持っていた双剣を投げつける。

「何をする気…!!?」

あつけなく弾かれたにも関わらず、もう一対投げつける彼女に疑問に思つた時、不意に黒化英靈が振り返る。

そこには、さつき弾かれたはずの双剣があつた。

「二対の双剣で四方を囲む…エール様はこれを狙つて、つ！？しかし、あれでは！」

確実に通ると思った攻撃も、黒化英靈は魔力の霧を展開して防ぎにかかつた。と、

「読めてんのよ！」

彼女がそう言うと同時に、剣が全て爆発し、魔力の霧を吹き飛ばした。

「……偽・螺旋剣Ⅱ！」
カラド・ボルグ

何かを呑いた後、間髪いれずに矢を放つ。

「す、凄い…」

「こ、これなら倒せた、よね…？」

あまりの威力に呆然としながら、希望的観測を述べる。

彼女も終わりと思つたのか、煙が晴れるのをじつと待つてゐる。

突然、煙が吹き飛び、黒化英靈が剣を構えているのが見えた。

「あれでまだ…!?まずい、宝具の一撃目…！」

「お姉ちゃん、逃げて！」

イリヤスフィールが叫ぶけど、彼女は一度こちらを見て、しまつた、と言うような顔をして、そのまま動かない。

「お姉ちゃん、どうして逃げないの…？」

…逃げられるはずがない。彼女がお兄ちゃんと同じなら、絶対に。なぜなら…：

「私達が…貴女が後ろにいるから。今から逃げても、私達の足じや間に合わない。彼女が止められなければ、貴女が死ぬ…。それが分かつていて、逃げられるような人じやない」

「そんな…」

「お二人とも、あれを…！」

サファイアが促すままに見ると、自身の背丈より大きな盾を構える彼女の姿があつた。

「約束された…」

魔力が膨れ上がり、黒化英靈が真名を開放するのに合わせ、彼女も盾を振り上げる。

「勝利の剣!!?」

「仮想道具、人理の基礎!!?」

彼女が真名開放すると同時に、聖剣の一撃が襲う。

「はあああああああつ！」

彼女は盾を地面に突き立て、片膝をついて攻撃に耐えていた。「聖剣の攻撃を完全に止めていきます…あの盾は一体…？」

「お姉ちゃん…」

驚愕するサファイアをよそに、彼女は攻撃を止め続け、そして…

「お、抑え切った…」

攻撃が止んだ直後に盾は消滅したものの、一切攻撃を通す事なく防ぎ切つた。

「…はあつ…はあつ…これで、今度こそ…終わらせてあげる！」

大きく息を切らしながら、再び弓を構えた彼女は、先程とは別の矢を出現させ、勢いよく放つと同時に膝をつく。

黒化英靈は聖剣を放った後僅かに硬直していたけれど、矢に気付くとすぐに動き出し、ギリギリで弾き飛ばして彼女に向かつて突進する。

「お姉ちゃん!!?」

黒化英靈は彼女の目の前に立ち、戦い始める直前を再現するように剣を振り上げ、振り下ろそうとした瞬間、

「!?」

さつき躱したはずの矢が、黒化英靈の胸に突き刺さった。

「…さつきので、矢が躱されるのは想定済み…。中からなら対魔力も何もないよね！壊れた幻想！」

彼女の言葉に反応して、刺さった矢がそのまま爆発し、黒化英靈の身体を吹き飛ばした。

「…クラスカード、セイバー…回収、完了」

彼女が出現したカードを拾つて、今回の戦いは遂に終わった…。

} 美遊

s
i
d
e

o
u
t
{

第7話 束の間の休息

↙エール side ↘

壊れた幻想を使った直後、完全に魔力が切れた私はアーチャーの力を維持できなくなり、元の姿に戻った。

「クラスカード『セイバー』：回収、完了」

……ごめんなさい、セイバー。貴女が歩んだ道は、間違いじやなかつた…。ここじゃないどこかで、それを教えてくれる人に必ず会えるから。それまで、休んでいて…

そう祈りながら、出現したカードを拾う。

「…な、なんとかなつた…」

正直なところ、最後の攻撃は賭けだった。

残った魔力は矢一本放つのが精々。その上初撃はほぼ躰される。苦肉の策として、追尾能力を持つ赤原猟犬フルンディングを使つたけど、もしもそれが弾かれたのではなく破壊されていたらと思うとゾッとする。

「ブハッ！」

「死ぬかと思いましたわ」

と、地面から凜とルヴィアが飛び出してきた。

生きているとは思つていたけど、まさか地中に潜つていたとは…：

「お姉ちゃん!!?」

「おつとど…」

半ば呆れつつも感心していると、今度はイリヤが抱きついてきた。魔力切れと身体の酷使で結構キツいから、勘弁して欲しいとは思ふけれど、

「お姉ちゃん…良かつた…グス…」

…この状態で引き離すのも私の精神衛生上よろしくない。

姉としての威厳を総動員してなんとか堪える。

「うん…イリヤも無事で、良かつた」

言葉になると、守れたという実感が湧いてくる。

ホツとして崩れ落ちそうになるのを必死に抑えながら、私はイリヤ

を抱きしめた。

「あー、状況がさっぱりなんだけど、どういう事?これ」
訳がわからない、という顔で凛が聞いてくる。

「…いけない。美遊、戻らないとマズいから、お願ひできる?」

「うん」

いい加減空間も保たないので、ひとまず元の世界に戻る。

「…それで、一体何があつたんですの?私達でも倒せなかつたアレを、どうやつて…?」

最低限の身だしなみを整えつつ、ルヴィアが聞いてくる。
「ま、聞きたいのは分かるけど、もう遅いわ。イリヤ達は先に帰らせて
もいいでしょ?イリヤ、そういう事で私は少し話があるから、先に
帰つて?美遊も一緒の方が嬉しいかな。この時間一人はさすがに
ね」

「う、うん…」「…分かつた」

……二人を何とか先に行かせ、姿が見えなくなつた途端、緊張が切
れて崩れかかる。

「ちよ…貴女、大丈夫!?!?」

「…あんまり大丈夫じゃないかも」

地面に倒れる寸前で凛が受け止めて、ベンチに寝かせてくれた。

「まつたく、イリヤを先に帰したのって、心配させたくないから?」

「ま、そんなとこ…姉は妹にカツコつけたいものなのよ。凛も分かる
でしょ?……流石に、回路開いて一日足らずでやるにはハードが過ぎ
たけど」

「なつ…!それつてどういう…!?!?」

「あなた魔術回路を持つて…つ!その目はどうしたんですの!?!?」
「みたい。昨日のキャスター戦の後、やつてみたらあつた…?目つて
何の事?」

驚くルヴィアに、私は不思議に思つて尋ねる。

……そろそろ、限界、かも…。

「見た方が早いですわ。エールスフィール、こちらを」

手鏡を貸してくれたので見てみると、片方の目が変色し、アーリ

チャードと同じ色になっていた。

「あー……多分、行き過ぎた魔術行使の代償、かな」

「……もう一度聞きますわ。何をしたのですか？」

「……カードを使って、英靈の力を私に降ろしたの。ごめん、ちょっと

限界。悪いけど……詳しくは……明日に……」

言いながらも、疲れが出たのか瞼が重くなり、私は意識を手放した

……。

エール side out

凜 side out

……寝ちゃったか

「身体のあちこちに過度の負担が掛かった跡がありますわ。詳しく述べませんが、相當な無茶をした、という事でしょう」

エールから事情を聞き出そうとしたけど、これじゃ無理ね。

「カードを使った、つて言つてたけど、ステッキも無しにどうやつて……。考えてもしょがなさそうね。明日もう一度話を聞きましょう」「それしかないですね」

取り敢えず今回の事を棚上げして、私達はエールを部屋に運んで帰つた。

凜 side out

———

イリヤ side out

「38. 2度。風邪ではなさですが、熱がありますね」

「……不覚…」

次の日、なかなかお姉ちゃんが下りてこないので様子を見てみたら、なんと熱を出していた。

「だ、大丈夫？ お姉ちゃん」

心配になつて聞いてみると、

「これくらいどうつてことない……ほら」

いつもよりたどたどしい口調で言いながら、おでこを出してくる。
えと、触つてみて、つて事かな…？ つてわわつ…？

「ふふ、イリヤはあつたかいね〜」

「ちよ、お姉ちゃん!!?」

お姉ちゃんに近づいたら、突然抱き締められてベッドに引き倒されてしまつた。

「お、お姉ちゃん、私学校があるんだけど…！」

「ふふふ〜、しらな〜い」

「お姉ちゃんホントに大丈夫なの!!?」

抵抗しても今まで見た事のないテンションのまま私を撫で続ける
お姉ちゃん。

「せ、セラ！ なんとかして！」

私一人では抜け出せないので、セラに助けを求めたんだけど、
「…今日はイリヤさんもお休みと連絡しておきます。ゆっくりしてく
ださい」

「セラ〜!!?」

そう言つて部屋を出て行つてしまつた。

「(まつたく、エールさんもまだ子どもな所がありますね。…少しホツ
としました。ずっと姉として振る舞つてきたのですから、こんな時く
らい甘えさせてあげるのもいいでしょう)」

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「……行つた、かな。まさかコレで通じるとは思わなかつたなあ」

セラが部屋から出て行くと、お姉ちゃんが正気に戻つて咳く。

「あれ？お姉ちゃん平気なの？」

「大丈夫って言つたでしょ？さつきのは演技」

そ、そうだつたんだ…でも、なんで演技なんてしたんだろ？

「自覚ないかもしないけど、三日も遅くに戦つてたら体に疲れも溜まつてるはずよ？」という訳で、今日はゆっくり休んで疲れを取りなさい。どうせ学校行つても寝ちゃうだろうし」

私も疲れたからもう寝るね、と言つて目を閉じるお姉ちゃん。

本当に疲れていたみたいで、すぐに寝息が聞こえてきた。

「…お姉ちゃんの寝顔、初めて見たかも。可愛いなあ…」

「ずっと一緒にいるのに見てないんですか？」

私の独り言にルビーが食いついてきた。

「うん…お姉ちゃん、いつも私の後に寝て、私より早く起きちゃうから

ら」

毎日寝顔をじっくり見られてると知つてからは恥ずかしいから別々に寝てるし。

「なんともしつかりしたお姉さんですね。この歳で大したものです」

「うん…私の、自慢のお姉ちゃん…」

気が緩んだのか、私の瞼もだんだんと下がつてくる。

お姉ちゃんの言つた通り、結構疲れてたみたい。

「…お休みなさい。今日はゆっくり休んでください、マイマスターイリヤさん」

ルビーのそんな声を遠くに聞きながら、私も意識を落とした。

／イリヤ side out／

／セラ side ／

「で、どうだつた？」

私が下りてくるなり、様子を聞いてくるリズ。

普段どんなにだらしがなくとも、メイドとして最低限のものは持つてゐる、と信じたい。

「エールさんは、恐らく極端な魔力消費が原因の発熱。魔術回路も開いていたりするようでしたし、ほぼ間違いないでしょう。イリヤさんも、封印が解ける一歩手前までいったようです」

そう言いながら、私は事の重さに崩れ落ちる。

「あの封印は命の危険とかのレベルでなければ解けないというのに！」
「どうか、何も知らないはずのエールさんがどうやって回路を…！」
二人が厄介ごとに巻き込まれてしているのでは、と頭を悩ませている
と、

「考えすぎだつてー。交通事故に遭いかけたとかそんなんじやないの？」

せん！」

呑氣なりズに一喝する。

「ああ、おまけに最近二人が隠し事をしているようなつ……！」

「年頃の娘なんてそんなもん。気になるならエールに聞けばいい」

あつれらかんとした口調でリスが言う

……結局のところ、それしかなきそうでした。ため息をつきつつ、私は家事に戻りました。

セラ
side
out

エール side

「…………、うん…………」

…そこそこ寝たみたいね。

目が覚めると、もう一時を回つていた。

疲れている自覚はあつたけど、ここまでとは思わなかつたなあ…。

「すう…すう……」

腕の中を見ると、気持ち良さそうに寝ているイリヤ。

抱き締めたまま寝ちゃつたみたい。

「ふふつ。可愛い顔しちやつて…」

私はイリヤを起こさないようにそつと腕を外し、軽く髪を梳いてあげる。

……昨日のは気のせいだつたのかな?

昨夜イリヤが抱きついてきた時、イリヤの気配がダブつたような気がしたけど、今はそんな感じは全くない。

魔力切れとかのせいで感覚がおかしくなつてたんでしょう。

自分の中でもう結論づけた後、ある事を思い出した。

「…あ」

凛達への説明がまだ終わつてなかつた。

：行かない訳にもいかない、か。

久し振りにイリヤの寝顔をじっくり堪能したかつたけど、まあ仕方がない。

机に置いてあつたお昼を食べて、イリヤへの書き置きを残してルヴィアの屋敷に向かつたのだけど…

「遅かつたわね。昼までには来るかと思つてたわ」

開口一番これである。

「魔力切れのせいできちよつと熱出してね。さつきやつと下がつたところだから」

取り敢えず事情を説明する。

「大丈夫なの？」

「万全じやないけどそこそこ魔力も溜まつてきたし、寝てたから身体も大体平氣…つて美遊!?!?どうしたのその格好!?!?」

後ろから入ってきた美遊が心配してくれたけど、その格好を見て驚く。

いや、メイド服つて何!?!?普段の美遊はどこにいったの!?!?

「ふえ?あ、いや…その、これは…」

人に見られたい格好ではないのか、自分の服を見て恥ずかしそうに

ワタワタと慌てる美遊。

……どうしよう。持ち帰りたい程可愛い。

「恥ずかしがる事はありませんわ美遊。それはエーデルフェルト家の正式なメイド服なのですか？」

「…児童労働は法律違反って知ってる？」

あまりに堂々としていたので一瞬流しかけたけど、言つてはかなり際どい。

「あ、でもその代わりに、衣食住の保証をしてもらつてるから…」

…まあ、美遊がいいなら気にしてもしようがないか。

「あーもう、話がだいぶ逸れちゃつたじゃない。エール、昨夜の事、改めて聞かせてもらうわよ」

いい加減我慢の限界だったのか、凜が強引に話を切り替えて本題に入ってきた。

「はいはい、分かつた、話すわよ。…さて、何から話したものかしらね…」

そう言いながら、私は二人に昨夜の一部始終を話した。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「…………とまあ、大体こんな感じ、かな」

「英靈の力を自分に降ろす…カードにそんな力があつたなんて…」

「エールスフィール、貴女最初から知つていましたの？」

話し終えた後、呆然と呟く凜。

一方でルヴィアは疑うような口ぶりで聞いてくる。

「まさか。仮説は立ててあつたけど確証は無かつたわ。あの時は他に手がないからそれに賭けるしかなかつたけどね」

ホント、よくもまあ都合よくいつたものだわ。

「それで、ホントに身体は何ともないの？」

今度は凜が心配そうに聞いてくる。

「大丈夫だつてば。昨日のはほとんど魔力切れのせいだし。つと、それで思い出した。今日誰も目の事に触れてこなかつたんだけど、何か

した？」

イリヤなんて至近距離から見たはずなのに気付いたようすはなかつたし。

「それでしたら、貴女を家に運んだ際にカラーコンタクトを押し込んでおきましたわ。あのままではなにかとマズいでしょう？」

……それが疲れて寝てる人にする事か。いや、助かつたけどね‥。

それでもちよつと文句を言おうかと口を開きかけた時、

「は、はいいいいいつ!!?」

途中で抜けた美遊の悲鳴が屋敷中に響き渡った。

「美遊つ!!? 一体何事ですの!!?」

私が慌てて窓の外を覗くと、ウチに向かつて駆けていく美遊の姿が見えた。……メイド服のままで。

「……多分、大丈夫だと思う。私の家に入つていつたし」

「しかし今の悲鳴は……！」

「イリヤつてスイッチ入ると暴走するから…。ルビーとか使つて美遊の格好見たんじやない?というか、意外と美遊つて押しに弱いのね」まつたく世話がやける。

そう思いつつ、私は立ち上がる。

「帰るの?」

「話す事は話したし、あつちの始末もつけなきや。あ、でもその前にお願ひがあるんだけど、いい?」

「どうせカードを使わせてくれ、でしよう?いいわよ別に。戦力が増えるのは嬉しいし。全部回収したら返してくれれば問題ないわ」

私の頼みは予想済みですか。話が早くて助かる。

「ありがと。でももう一つ。昨日の感じだと、宝具使うとすぐ魔力切れしそうだから、予備の魔力として宝石を貸して欲しいのよ。戦闘前に渡してくれればいいんだけど。使わなかつた分は返すよ」

まあ、固有結界なんて使えないだろうけど、ステッキで補充出来ない私としては保険をかけておきたい。

「それでしたら、私が貸して差し上げますわ。使つた分の返済も結構。そこの貧乏人のように取り立てるような真似はしませんから安心し

て使いなさい」

オーッホッホッホ！と高笑いするルヴィアと、それを睨み付ける

凛。

「うつさいわよルヴィア！誰がこんな子供から取り立てるかつてーの
!!？」

「おや、それは意外ですわね。貴女はもつと金に汚いものだとばかり
⋮」

ああ、またいつものやり取りを……。

「そ、それじゃ私はこれで失礼するわ。宝石の件、ありがとね、ルヴィ
ア」

そう言つて、巻き込まれない内に私は部屋を出た。

↙エール side out ↘

↙イリヤ side ↘

「いやーごめんね、なんか変なテンションになっちゃつて」
「い、いえ⋮」

うう⋮氣まずい。

一旦氣分が落ち着くと、何を話したらいいか分からなくなる。

——目が覚めた私は、お姉ちゃんもいなくて暇だった。

ふとミユさんの事が気になつて、ルビーを使ってテレビ電話をした
ら……なんとミユさんはメイド服を着ていた。

見られたくなかったのか恥ずかしがるミユさんの姿に、変なスイツ
チが入っちゃつて、そのままで呼び出して抱きついたり色々やらかし
て、今に至る。

「アーチャーのカード…」

なんて回想をしていると、ミユさんが机の上のカードに気付いて咳
く。

「あ、うん。あの後お姉ちゃんが置いていったみたい。……昨日のお

姉ちゃん、凄かつたよね…」

「うん…」

私達どころか、凛さん達すら敵わなかつた相手を倒しちゃうんだもん。あのとんでもない宝具も完全に防いで。

「（結局昨日のつて、どういう事だつたんです？サファイアちゃん）」

「（見た方が早いと思う。こちらに）」

ルビー達が何か言いながら、ベランダの方へとふわふわ飛んでいく。

「また、助けて貰つちゃつたな…」

「イリヤスフイール…？」

思わず言葉を漏らした私に、ミユさんが不思議そうに声を上げる。「ミユさん、前に聞いたよね、私がどうして戦うのかつて。あの時言ったの、ホントは二番目の理由だつたんだ…」

そう言つて、私は両手をついて天井を見上げる。

「私ね、ずううつとお姉ちゃんに助けられてきたの…。迷子になつてたのを見つけてくれたり、色々…私が困つた時にはすぐになつてくれて、助けてくれた…。」

もちろん、嬉しかつたよ？いつも見ててくれるんだつて、安心できた。

でも、これで良いのかなつて思つたりもしたんだ。お姉ちゃんの重荷になつてるんじやないかつて。

…だから、ルビーと出会つて、魔法少女をやる事になつて…少し嬉しかつた。お姉ちゃんの前に立つて戦つて…守られてばかりじやないつて、お姉ちゃんを安心させてあげられるつて…そう思つた。だけど…」

また、お姉ちゃんに助けて貰つちゃつた。

悔しさで私は手を強く握る。

「結局、私は何も出来なかつた…。お姉ちゃんに頼つてばかりで、結局

何も…！」

「……」

「――、ごめんね。なんかグチみたいな事言つちゃつて…今のは聞

かなかつた事に「少しずつでいいと思う」え？」

無理に声を明るくして話を誤魔化そうとしたら、不意にミユさんが声を上げる。

「今何も出来なかつたとしても、少しずつ…出来る事を増やして…。いつか、頼らなくともいいくらいになれたら、それで良いんだと思う。それに多分…」

”彼女は貴女の事を、重荷だなんて思つてない。”

「あ…」

それは、自分以外の誰かに言つて欲しかつたものだつた。心からそう思つて言つてくれた言葉に、気分が軽くなる。

「そつか…少しずつでいいんだ。ハハハ、そうだよね。いきなりなんて出来る訳なかつた…」

今までずつと頼つてきて、急にひとりでやろうとして…空回りして…結局助けて貰つちゃつて。

「…焦つてたのかな、私。お姉ちゃんに迷惑かけたくないつて。…でも、うん。ありがとう、ミユさん。なんか吹つ切れた氣がするよ」「…イリヤスフィールの気持ちも、なんとなく分かるから」

私がお礼を言つたけど、ミユさんの返しに違和感を感じた。

「そういうえばミユさん。イリヤスフィールつて呼ぶの、長くない？イリヤでいいよ。フルネームで呼ばれるのつてちょっとくすぐつたいし、友達はみんなそう呼ぶから」

「友、達…？」

「え!?違うの!?私の片思い!?!?」

まだ友達にするなれていなかつた、と思わずショックを受けかけたけど、少し違うみたいだつた。

「あ、いや…そうじゃなくて……」

ミユさんは、なにかを噛みしめるような顔をした後、軽く顔を赤らめて、

「それなら、その、私も…呼び捨てでいい……」

そう、言つてくれた。

…嬉しかつた。なんていうか、認めてもらえたみたいで。

だから私は、

「うん！改めて、これからよろしくね！ミユ！」

満面の笑みと共に、手を差し出した。

「、こちらこそよろしく。…イリヤ」

ミユは一瞬こちらを見て、おずおずといつた感じで手を握り返してくれた。

「…思つたより酷くなかった、つていうか…なんか仲良くなつてない？」「人とも」

「ふえ？」

急に後ろから声がして振り向いくと、心配して損した、みたいな呆れ顔をしたお姉ちゃんが立つていた。

「お、お姉ちゃん！？いつからそこに！？」

「今来たどこだけど。なに？私がいちや困るような事でも話してたの？」

「え、あ…いや、その…」

いちや困るというか、聞かれたくないというか…。

「…ま、いいや。それよりイリヤ、あなたさつき暴走したでしょ。屋敷中に美遊の悲鳴が響いて何事かと思つたじやない」

なんて言おうか迷つていると、お姉ちゃんは話を変えて、腰に手を当てて”めつ！”といった感じで注意してきた。

「あ、あはは…スママセンでした」

助かつたと思いながら、取り敢えずミユに頭を下げる。

「い、いえ…イリヤも悪気があつた訳じやないし…。それよりエールスフィール。貴女に聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「ん？私？」

ミユがそう言うと、お姉ちゃんは少し考えこんだ。

「…まあ、いいよ。私も少し話したいとは思つてたし。場所変えよつか」

「え？ここじゃダメなの？」

なんで場所を変えるのかと思つたけど、

「今の美遊の格好見て正氣でいられるの？」

「う…ハイ、いつてらつしゃい二人とも」

お姉ちゃんのひとことに何も言えなくなってしまった。

「分かればよろしい。美遊、行こ?」

「…うん。それじゃイリヤ、また後でね」

そう言つて一人はどこかに行つちやつた。

イリヤ side out

第8話 告白、そして…：

↙エール s i d e ↘

「さて、と。ここでいいかな。それで？美遊。私に聞きたいことって、何？」

美遊を公園まで連れて来た私は、周囲に人がいない事を確認して振り返る。

「……あの、その…」

さつきの顔はどこへやら、踏ん切りがつかないのかオロオロとしている美遊。

「…私から切り出すか。

「私が何者なのか、かな」

「つ…? どうして…」

読まれた事に驚いたのか、美遊が目を見開く。

「……不自然だつて自覚はあつたもの。疑われるのは承知の上で動いてたし」

寧ろ疑われない方がおかしいよね、と軽く笑うと、美遊も落ち着いたのか、真っ直ぐ私を見る。

「じゃあ、やつぱり貴女は…」

「…うん、魔術の事は、ずっと前から知つてた。あ、勘違いしないでね？イリヤはホントに何も知らなかつたから」

そこまで言つて、私も一度言葉を切り、目を閉じる。

話しておくべき、だよね。

改めて意を決し、目を開く。

「――教えてあげる。私が魔術に関わった始まりの日……、第四次聖杯戦争について」

この世界の聖杯戦争の事、第三次に起きた聖杯の汚染、第四次の冬木大火災…、そして、私がその時の生き残りだという事など、アインツベルンや自分の記録については触れずに語れるだけは全部話した。

「……とまあ、こんな所、かな」

「そんな事が……」

信じられないといった顔で呆然としている美遊。

普通に考えたら中々に重い話だし、無理もないかな。

「……その、話しにくい事を聞いてしまつて、ごめんなさい」

我に返つて謝罪してくる美遊には、何故かその言葉とは別にどこか

罪悪感を感じている響きがあつた。

……まつたく、生真面目というか、背負いこみ過ぎというか。

「別に気にしなくていいわ。貴女に比べたらこれくらい大した事ないのだし」

自分でも踏み込み過ぎている自覚はあつたけど、私は敢えて爆弾を投下する事にした。

「…………え？」

「……さつき言つたじやない？汚染された聖杯に触れた、つて。だから、私は聖杯の気配を感じ取れるの」

驚いて固まっている美遊に更にそう続ける。

「貴女まさか……つ!?」

一転して怯えたような表情になる美遊を、優しく抱きしめる。

「怖がらなくとも大丈夫。私は貴女の敵じやないし、誰かに話すつもりもないわ」

安心させるように頭を撫ると、強張っていた身体から少し力が抜ける。

「たつた一人でこの世界に来て、誰をここまで信じていいのかも分からず、ずっと気を張つて……」

——ああ、そつか。

聖杯絡みといつても、それだけじや私がここまで動く事はなかつたと思う。それがどうしてこんなにも美遊が気になつたのか、自分でもちよつと不思議だつたけど……やつと分かつた。

その気持ちは私にも当てはまるかも知れなかつた思いだからだ。持つてゐる記録の未来にただひたすらに怯える毎日。

中心となつてゐる衛宮家以外に拾われていたら、そうなつていた事は想像に難くない。

だからこそ私は……

「……これからは、貴女は私が守るから。だから、無理しなくていいんだよ」

「あ……」

手を伸ばしたいと思つたんだ。

「あ、ああ……」

緊張が切れたのか、美遊が私にしがみつくようにして嗚咽を漏らす。

「大丈夫、大丈夫だから……」

私は美遊が安心できるように、ただひたすら美遊を撫で続けた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「……寝ちゃつたか」

泣き続けること十数分。

疲れたのか美遊は私に抱きついたまま眠つていた。私は美遊を起こさないようにしつつ、ベンチへと座り、羽織つていた上着を美遊にかける。

腕の中の寝顔を覗き見ると、普段は見せない柔らかい笑みを浮かべていた。

「ふふつ、可愛い顔しちゃつて」

普段が不器用で素つ氣ない態度なだけに、こういう顔をしていると可愛くて仕方がない。

私は小さく笑いつつ、丁寧に髪を漉いた。

「……ま……ル……ま……」

……ん、……？

「お目覚めですか、エール様」

「あれ？ サファアイア？」

気がつくと、顔の側でサファアイアがフヨフヨと漂っていた。

「あちや、寝ちゃつてた？」

「はい。お二人とも、起こすのが躊躇われるほどにぐっすりと」

「アハハ……ちょっと不用心だつたなあ、今何時？」

見渡してみれば、もう完全に日が落ちている。

流石に遅くなり過ぎだよね。

「19時半、といったところです。私としても、ここまで美遊様が無防備な寝顔をしているのは初めて見たので、『自分で目覚めるまで待とうと思つていたのですが……』

「もうすぐ夕飯ね、ルヴィアが文句言つてこなきやいいけど。つと、美遊、帰るよ！」

ユサユサと美遊を揺すると、

「ん……お兄、ちゃん？」

「……」

寝ぼけているのか、薄目の上目遣いでそう言つてきた。

……なに、この可愛い子は。

つ、じやなくて！ どうしよう…。

「か、帰るよ、美遊」

戸惑いながらそう繰り返すと、美遊はなにやら腕を首にかけ…

「……抱っこして？」

「つ！？」

美遊が甘えん坊!? どうしよう、こんなレアな事態が起これり得るの!
!? つていうか正気に戻った時大変なことにならない!?

「……外だからおんぶで勘弁してくれ」

パニックの末、口調をそれっぽくして乗り切ることにした。

……抱っこは流石に身長差その他が足りないので厳しい、などと意外とどうでもいいところは冷静だつた。

「うん……」

まだ寝ぼけているらしい美遊は、私の言葉に疑問を持つことなく首に手をまわす。

「まつたく……ほら、もう少し寝てろ」

「うん……」

そう言つたきり、こくりとまた舟を漕ぐ。

「……見てはならないものを見てしまったような気がするのですが」

「……今のは他言無用よ。特にルビーには絶対話しちゃダメ」

呆然と呟くサファイアに釘を刺し、公園を出る。

.....。

「……ところでエール様は、美遊様とどのようなお話を?」

無言で歩いていると、不意にサファイアが話しかけてきた。

「タベのカード使つた事とか色々かな」

流石に本当の事は言えないのに、ぐく一部分だけを抜き出して答える。

「何故カードの使い方を知つていたのか、という質問はルヴィア様達が既にしたと思いますので、私は別の事を。何故アーチャーを選んだのですか?」

上手く話を逸らせたと思つたら、これはこれで厄介な質問ね。

「……んく、取り敢えずキヤスターはほぼほぼ役に立たないと思つたし、ランサーはアク禁食らつた、つて言つてたから使えるか不安だつたし、ライダーは近接型だけど、セイバーには劣るから、宝具使う前にやられちゃうかなって。で、残つたのがアーチャー。まあ、大体

は直感だけど

「……なるほど」

取り敢えずそれらしい理由を並べて誤魔化す。

「さて、と。そろそろ起きなさい、美遊。もうすぐ家に着くよ」「これ以上の追及を避ける意味も兼ねて美遊を起^レこしにかかる。

「ん……お兄ちゃ……え、エールスフイール!?!?え?え!?!?」

今度はしつかり起きたのか、勘違いに気付いてパニックになる美遊。

「落ち着いて、つていうか落ちるから! 変に動かない!」

気が動転した美遊が落ちそうになるのを必死で押さえ、ギリギリで体勢を立て直す。

「……あ、あの……なんで、私、その…」

「おんぶされてるのか、つて?」

美遊は顔を真っ赤にしつつ、こくこくと頷く。

「美遊がなかなか起きなくってね。なんかおんぶとか単語が聞こえてきたからやつてみた。時間も遅いし」

「…………そう」

私が答えると、美遊は恥ずかしそうにしつつもどこか憂いを帯びた表情を浮かべる。

「……ねえ、美遊?」

「え?」

「私は美遊のお兄ちゃんにはなれないけれど……美遊さえ良かつたら、私の事…『お姉ちゃん』つて呼んでくれていいよ」

「…………!」

美遊にとつて『お兄ちゃん』がどれほど大きな存在なのは、あの甘えた様子を見れば明らか。知り合つたばかりの私では、到底代わりになんてなれない。

でも、それでも守りたいと思つたから。私なりに、美遊の事を支えてあげたい。

「……着いたよ」

屋敷の門の前で、美遊を下ろす。美遊は俯いたまま、無言で立つて

いる。

「それじゃ、また今夜。鏡面界で会いましょう?」

そう言つて私は踵を返す。

「……ありがとう、お姉ちゃん」

家のドアを閉じる直前、聞こえるかどうかの小さな声が、私の耳に届いた。

↙エール side out ↘

第9話 守りたい日常

「エール side 」

「あ、お帰りなさい、エールさん」

「ただいま、つて、え？」

想定していなかつた声に迎えられて、つい素つ頓狂な声を上げる。

「お久しぶりです。思つたよりも元気そうで良かつたです」

そう微笑んで顔を上げるのは……

「桜!?」

私の年上の妹分、桜だつた。

この世界の桜は魔術との関わりはほとんどないといつてい。髪色は変色しているけど、臓硯は第四次の時に既に死んでいるらしく、私が来た直後にはもう衛宮家に通い始めていた。

虚数魔術の危険性を考えれば、制御の為に習つてゐる可能性もあるけれど、切嗣もママもいない以上、その可能性も低い。

魔術絡みの事に首を突つ込んでいる今、桜とはあまり会いたくはなかつたのだけど……

「?どうかしましたか？あ、やつぱりまだ休んでいた方が…」

「う、ううん。平氣。それより今日はどうしたの？」

そんな事を考えていたら、体調が悪いと思われて心配されてしまつた。

「あ、それはですね…」

「俺がエールが熱出したつて言つたら、心配して来てくれたんだよ」

「あ、土郎いたんだ」

適当に話を誤魔化そうとしたら、台所から土郎が出てきた。

「つて、また夕飯作つてるの？当番じゃない日にやるとセラがうるさいよ？イリヤは喜ぶけどさ」

「桜が來てるからな。久々に一緒に作りたいって言つたら許してくれたよ」

「すみません、先輩…」

その代わり後で一日譲る事になつたけどな、と笑う士郎に、申し訳なさそうにしつつも頬を染める桜。

……こんなにわかりやすい上にいい雰囲気になるのに、なんでこの朴念仁には気付かないのかしら。

いや、まあイリヤの士郎愛を考えたら、今の状態がある意味ベストなのかも知れなわけです。

「あ、先輩…」

「ん？ああ、これか？」

少しづれた事を考えていると、いつの間にか二人は台所に戻つていた。

桜の言わんとしている事を察して、必要なものを即座に用意している士郎。相変わらず呆れた以心伝心っぷり。

「……こう台所で一緒に作業してると、最早夫婦にしか見えないよね」

「んなつ！」

「ふ、夫婦！」

「お姉ちゃん！」

ふと思わず言葉を漏らすと、盛大に反応する三人。

「……覗くくらいなら堂々と入つてきなさいよ、イリヤ」

「あ、いや、その…ハイ、スママセンデンタ」

ため息をつきつつ階段の方を見てみると、バツが悪そうにイリヤが降りてくる。

「まつたく、せつかく来てくれるんだから挨拶くらいしつかりなさい」

「う…ハイ。でもあの桃色空間に近づくのは私の精神力が保たないツ！」

「イリヤ（さん）つ！」

イリヤの告白に更に顔を真っ赤にする士郎と桜。

見事に息ぴつたり。

「あ～…じゃあしようがないか。まつたく、桜もなんでこんな朴念仁に引っかかる「わー！わー！え、エールさん！？」：フフツ。そんな

に必死になつて。やつぱり桜は可愛いよね？土郎？」「なんで俺に振る！？いや、まあ桜は可愛いけどさ」

「くくく！／＼

「もうく…」

流れを利用して桜をからかう。

……うん、やつぱりこういう日常つていいな。

こんな何気ない毎日をずっと過ごせたらどんなにいいか。

そう、何度も考え続けてきた。

今はその日常から少しばかり外れた事をしてるので、この思いだけは決して変わらない。

私達の日常を守るために、一刻も早く今の異変を解決する。そして、美遊も一緒に、みんなで平和な日々を過ごせるようにする。三人の笑顔を見ながら、私は決意を新たにした。

↙エール side out ↘

第10話 チカラの胎動

シリヤ side

「見たところもぬけの殻といったところですわね。どういう事ですか？」

ぱつと見誰もいない鏡面界を見回して、ルヴィアさんが疑うような声を上げる。

「場所間違えちゃった、とか？」

「いや、流石にそれはないでしょ」

「ええ。鏡面界はもとは單なる世界の境界……空間としては存在しないわ。それがある以上、必ずどこかに原因カーネがあるはずよ」

私の言葉をお姉ちゃんが否定して、リンさんが補足で説明してくれる。

あ、お姉ちゃんは鏡面界に入る前にカードを使つてたよ？「正直、鏡面界に入つてから夢幻召喚インストールする余裕があるとは思えない」…とかなんとか。

「にしても、回を重ねる毎に鏡面界が狭くなつてゐる気がするんだけど…どうして？セイバーとか見たら寧ろ広くして欲しいんだけど」

確かに…。

セイバーとの戦いは、一步間違えたら死んでてもおかしくなかつた。

こうして今思い出すだけで、思わず身体が震える。

「仕方ありませんわ。これはカードを回収するに伴つて歪みが小さくなつてゐるという証左。それに、初めは四方数キロもあつたそうですが、あり過ぎというのも困りものですねよ」

「……よくその条件でアーチャー倒せたね。化け物？つて、今その話はいいか。取り敢えず、歩いて探しましょ」

私が怯えている間に、お姉ちゃんが方針を決めていた。

「地味ですね。ド派手に魔力砲ぶつ放しまくつて一面焦土に変えるくらいのリリカルな探索法とかの方が魔法少女らしくて私の好みな

のですが…」

……最近あまり喋つてないからストレスが溜まつてるだけだ、と信じたい。

「それって探索じやなくてはか……？」

「今こそ必殺のリリカルラジカルジエノサイドをく…つて、イリヤさん？」

我に返つてルビーの言葉に反論しようとした時、視界の端で何かが動いたような気がした。

「今、何か動いたよう 「イリヤ！」 ふえ？」

力キン！

その事をルビーに伝えようとした瞬間、お姉ちゃんが飛び出して何かを弾き飛ばす。

「間に合つ…つつ！」

「お姉ちゃん！？」

何が起きたのか理解するより早く、続けて放たれた短剣がお姉ちゃんの腕を掠める。

「くつ、黒鍵！」

お姉ちゃんがすかさず細い剣を取り出して、短剣が飛んで来た方向に投げる。

「手応えなしか…！」

「つて、『お姉ちゃん』！？何故美遊ミユが…私ワタクシですらまだ名前呼びですのに！？」

「それ今言うこと！？」

「言つてる場合か！？方陣を組むわ！全方位警戒！」

私の内心を代弁したリンさんが全員に指示を出す。

「お姉ちゃん！大丈夫！？」

私はお姉ちゃんに駆け寄る。

「掠つただけよ。それより構えて！」

「攻撃まで気配に気付けなかつた……おまけに急所狙い……注意して！下手すりや即死よ！」

リンさんの言葉に反応して、身体がビクッと震える。

死……？

さつきまで思い出していた、セイバー戦での恐怖が戻つてくる。
怖い……こわい……コワイ……。

「敵を視認……総数、50以上！」

「嘘でしょう!?」完全に包囲されますわ！」

「軍勢とか聞いてないわよこのインチキが……！」

「暗殺者^{アサシン}風情が……舐めた真似してくれる……！」

みんなが何か言つてるけど、殆ど私の耳に入つてこない。
敵がまた短剣を構える。

「包囲を突破するわ！イリヤ！美遊！エール！火力を一点に集中！」

「はい！」

「了か：イリヤ？」

「ふえ？」

震えを抑えるのに精一杯だつた私は、みんなが走り出す中で一人だけ身動きが出来ないでいた。

「つ！·まずい···全投影^{ソードバレルフルオ}、連続···グツ!!?」

フオローしてくれようとしたのか、私の方に駆けてきたお姉ちゃんが、突然足を止めて蹲る。

「エール!!?」

「つ!!?夢幻^{インスト}召喚^{トール}が···！」

いきなり、お姉ちゃんの身体からカードが弾き出される。

あらわになつた腕は、さつき短剣が掠つた辺りからお姉ちゃんの肌が毒々しい紫色に変色して いた。

「まさか、毒!!?···二人とも、逃げなさい！」

「!!?チイツ···！」

リンさんの声と同時に、敵が一斉に短剣を投げつけてくる中、お姉ちゃんが腕を押さえながらこつちに走つてくる。……その様子が、酷くゆっくりに見えた。

……私の、せい？

……そうだ。

私を庇つたから、お姉ちゃんが怪我をした。

私が怯えて動けなかつたから、お姉ちゃんに無理をさせた。

今までに比べたら、敵だつてそんなに強くはなかつたはずなのに。

私が一手を遅らせたばつかりに、みんなに迷惑をかけて…拳句にま

たお姉ちゃんに庇われて……庇われて？

またお姉ちゃんに守られるの？そのせいでお姉ちゃんまで死なせるの？

…………そんなの、絶対ダメ。

『……ド派手に魔力砲をぶつ放しまくつて一面焦土に……』

ふと、さつきのルビーの言葉が浮かんだ。

ああ、そつか。それだつたらこの状況でも……

「!? 美遊！広域に障壁全開！早く！」

何かが力チリと外れたような感覚と共に、何もかもが吹き飛ばされていった。

「…………なに、コレ…」

「一体何が…………？」

隕石でも降つてきたみたいなクレーターを、呆然と見回す。

「お姉ちゃん！？」

不意に、ミュの声が聞こえた。

なんとなく声の方を見てみたら…

「……う、ぐう……」

ボロボロになつたミユに抱えられた、全身血だらけのお姉ちゃんがいた。

「…………え？お姉ちゃん…？ミユも……なん……!?？」

さつき、お姉ちゃんは何をしようとしてた？

その時、私の周りで何があつた？

……私は……何を、した？

「い、いやああつ！こんな、こんな事……私つ……！」

何が起きたか理解した。理解できてしまつた。

私はそれから逃げるよう、いやいやと首を振つて膝をつく。

「……う……イリ、ヤ……？」

「あ……」

私の声で気がついたのか、お姉ちゃんがミユに支えられながらこちらを見る。

何を言われる？助けようとしてくれたのに、こんな事をして……？無意識のうちに身体が震える。

お姉ちゃんの口がゆっくりと開き、告げられたのは……
「よか……つた…。無事……で……」

「!?？」

私を気遣う、優しい言葉だった。

また、だ……。

お姉ちゃんにこんな怪我させたのに、また気遣われて……。
結局、私は足手まといにしか、なつてなかつた。

「……もう…」

「イリヤ？？」

「もうイヤ！」

こんな自分が嫌で、いつそ何もかもが夢であつて欲しくて……気が付ければ私は、みんなの前から逃げ出していた。

「イリヤ…追わなきや…うつ!?」

イリヤの居なくなつた鏡面界。私は追いかけようと立ち上がりか
サニサズ、湯の痛めを刺れども。

「お姉ちゃん!?」？ルヴィアさん、早く治療を！」

我に返つた美遊が私を助け起こし、ルヴィアに治療を頼む。

「え、ええ。……しかし、私は治癒魔術は……遠坂凛！ 貴女は？」
トオサカリン

「似たり寄つたりだけどやらないよりマシでしょ！宝石ケチンじやな

「貴女こそ！」

言い争いながら私の治療にかかる一人。

うん。気持ちは嬉しいんだけど、ね？

「「「あ」」」

みんな私に気を取られて忘れてたみたいだけど、ここはまだ鏡面界。^{ミラーワールド}アサシンを倒した以上、当然空間は保たない。その証拠に、今まさに空がひび割れ始めている。

「み、美遊！急いで離脱を！」

「境界回廊」一部反転！」

— —

「大丈夫なの？お姉ちゃん」

間一髪で元の世界に戻ってきた私達。私は二人の必死の治療のお

陰でなんとか持ち直した。

「うん、普通にしてる分には平気。美遊も大丈夫？ 障壁越しとはいえ、

そこそこ衝撃あつたでしょ？」

「これくらいなんともない。治癒促進でもう治つてるし、まともに受けたお姉ちゃんの方が心配。リジエネレーション暗殺者アサシンの毒も受けてたのに…」

そう言つたきり俯いてしまつた美遊。

…思つたより心配させちゃつたかな。

少し反省しながら、美遊の頭を撫でる。

「ふえ？」

「大丈夫だよ。毒は概念的なものだつたから暗殺者アサシンが消えた時に一緒に消えだし、凛とルヴィアも宝石ケチらずほとんど治してくれたし。それより…」

私は美遊を安心させられるように笑う。

「美遊が笑つてくれてた方が、私は嬉しいかな」

「…うん！」

美遊は一瞬目を見開いた後、精一杯の笑顔を見せてくれた。

…うん、やつぱりこつちの方がいい。

「つて、そうですわ！ エールスファイール！ 何故美遊ミユが貴女ミユを『お姉ちゃん』ワタクシと呼んでいますの？ 私ですらまだ呼んでもらえてませんのに！」

またそれ！？

美遊に癒されていると、ルヴィアが泣き出さんばかりの勢いで問い合わせてくる。

「それに今だつてそんなに無防備な顔をして……！ そんな美遊ミユの顔は初めて見ましたわよ！？」

「…え？…つ！？あ、いや、あの…」

ルヴィアの言葉で今の状況を自覚したのか、顔を真っ赤にしてアワアワと弁解しようとする美遊。

これはこれで可愛いけど、流石に放置はかわいそうね。…どうしてお姉ちゃん呼びか、ねえ…。

「…姉としての貫禄の差じやないかしら」

詳細を話す訳にもいかないので、端的に答えてみる。実際問題、姉歴リ今生全てである私がルヴィアに負けるとは思わない。

「なつ……!?」

(これでも双子の姉ですのに……!)

私の答えにショックを受けたのか、何か咳きながら崩れ落ちるルヴィア。

「……ああつもう！今はそんなのいいでしようが！」

どうどう我慢の限界といった凛が声を荒げる。

……流石にもう現実逃避はしてられないか。

「……そうね。私は一度家に帰るわ。ややこしい事になってるだろうし」

「……任せていいのかしら？」

心配そうに尋ねる凛に、私は頷く。

「私はあの子の姉…。これは私がすべき事よ」

これは、イリヤを守りきれなかつた私の責任。姉として、私はあの子を支える義務があり、何よりそうしたいと思つて生きてきた。

「……分かつた。イリヤの事は、貴女に任せると。どつちに転んでもいいけど、支えてあげて頂戴」

私の目を見て一瞬哀しげな顔を浮かべた後、そう告げる凛。無理にイリヤを呼び戻すつもりはないみたいで助かる。

「分かつてる。それじゃ美遊、また明日」

「あ、うん。また明日」

最後に美遊の頭を軽く撫でた後、私は家へと足を向けた。

「姉、か……。私も、ちゃんとやれたら良かつたのかしらね……」

第11話 摆れる想い

↙エール side ↘

「じゃ、じゃあ私、学校行くね」

「あ…うん。行つてらっしゃい、イリヤ」

言い切らない内にバタン、と部屋の扉が閉じられてしまう。続いて玄関が開かれる音がして、そのままイリヤは学校に向かつたみたいだつた。

「——はあ」

布団から出てベッドに腰掛け直すと、思わず溜息が出る。
……結局、近づこうともしてくれなかつたなあ。

間違いなく昨日の事を引きずつてているのは分かるけど、徹底して接触を避けられるのは中々堪える。顔に出すとイリヤがまた落ち込むだろうと思つても押し殺せなかつた。

「——きて、そろそろお話をお聞かせ頂きたいのですが……」

「エール、平氣？」

と、不意にセラ達から声をかけられる。本気で凹んでたから二人のことが頭から抜け落ちていた。

「……大丈夫。問題ないわ」

「お話し頂けるなら、また後でも構いませんが……」

誤魔化そうとしたけど、声に力が入らなくて逆に心配させちゃつたみたい……。

気遣いは嬉しいけど、そもそも言つてられないから……

イリヤについても話さない訳にはいかないだろうし、伝えるなら早い方がいい。それに、ただでさえタベ見つかつた時にも無理言つて待つて貰つたんだから、これ以上氣を揉ませるのも気が引ける。

「本当に、大丈夫だから……。話すよ、タベの事も、これまでの事も——」

——————

「——じゃあ、私はまた少し眠るね。少しでも回復しておかなくちゃ」「え、ええ。それではお休みなさい、エールさん」

「……お休み」

一通りの事情を説明し終わり、二人が部屋から出していく。

「——ちょっと迂闊、だつたね……」

魔術云々なんて、普通の人が聞いたら耳を疑うような話をざく当たり前のように話してしまった。

セラはあれでアクシデントに弱いから、魔術の話が出てからずつとワタワタして気付いてなきそそうだつたけど、リズは多分何かしら勘付いてる。殆どの事には動じないのが普段は頼もしくもあつたけど、こんな怪しいタイミングでバレるのは勘弁してもらいたい。

……私の事も、その内ちゃんと話さないとね。家族と腹芸なんてやりたくないし。

まあ、今はカード回収を優先しよう。幸か不幸か、セラ達は事態が理解できる上、実質美遊一人で戦わせる訳にもいかないから、止めるに止められないって感じだつたし。ママ達と相談でもしたらまた意見が変わるかもしれないけど、取り敢えずバーサーカー戦の前に面倒な事にならなそうで良かつた。

「——もう寝よう。……イリヤ、大丈夫かな……」

布団に潜り込み、今はどうにも出来ない事に思いを馳せながら、私は意識を手放した——。

「ここにいたの、姉さん」

「おやサファイアちゃん。どうしましたか？」

体育の授業でイリヤさんから離れていた私の所にサファイアちゃんがやつてきました。

「美遊様に、エール様の様子を聞くように頼まれたから。あの状態のイリヤ様に尋ねるのは、美遊様も憚られたようで」

「そういうことですか？」

今朝からずっと落ち込んでますから、その気持ちは分かりますね。ぶつちやけ言つて、私もちよくなつと居心地悪かつたからここにいる訳ですし。

「エールさんなら無事ですよ。あの時の怪我も治つてましたし、昨日みたいに熱もなさそうでしたから。精々が治癒直後で身体がだるいくらいでしようか」

「ならないけど……」

ひとまず安心して貰えたみたいで、ホツと息をつくサファイアちゃん。

「あれ、じゃあエール様が今日欠席なのって……」

「イリヤさんが親バレしてしまいましたからね。大事を取つて、という名目でしたが、実際は尋問タイムじゃないですか？イリヤさんはもう夜出歩かないと約束しちゃいましたから、深くは追及されませんでしたが……」

「そう……」

ゲロつちゃわないで欲しいですけどね。魔法少女は正体不明でいてもらわないと。

「……イリヤ様は、もう……？」

そんな事を考えていた私とは違い、話をイリヤさんの方へとシフトしていくサファイアちゃん。

「もうムリっぽいですねアレは。セイバー戦辺りから本格的に死にかけましたし、完全な一般人だつたはずのイリヤさんがここまで凛さん

達に付き合えた事の方が凄いくらいです。おまけに……」

あの謎の力でエールさんに怪我をさせてしまったのがトドメになつたんでしょう。

「やはり、タベの件で……」

言いたいことを察したサファイアちゃんが重苦しげに咳くのに、私も頷きます。

「ええ、完全にトラウマになつてしまつたようです。今朝エールさんの様子を見に部屋までは行つたんですけど、手が届く距離には決して入ろうとしませんでしたから。撫でられるのも避けてましたし」

エールさんも勘付いてるようですが、やつぱり結構傷ついてるみたいでしたね。イリヤさんは自分の事で精一杯で気付かなかつたみたいですが、あのエールさんがイリヤさんの前で顔色を誤魔化せないなんてよつぽどです。

「姉さんはこれからどうするの?」

「別にどうもしませんよ? イリヤさんが私のマスターである事に変わりありませんし」

サファイアちゃん達を死地に送り出して高みの見物というのは気が引けますが、イリヤさんも心配ですし……

「という訳で、美遊さんには悪いですが、最後のカード回収はサファイアちゃん達だけでお願ひします」

「……分かつた」

それじゃあ、と別れる私達。サファイアちゃんも無理にイリヤさんの参加を言つてこない辺り感謝ですね。

「――さて」

一度イリヤさんには凜さんと会つてもらわないとけませんね。

↙エール s i d e ↘

「……辞表です」

ルビーに呼ばれてこつそり公園に来てみると、イリヤが凛に辞表を提出しているのが見えた。

「ま、こうなるかもとは思つてたけど」

「その…：最初は興味本位というか、面白半分だつたの。昔からお姉ちゃんに守られてばかりだつたから、お姉ちゃんの前に立つて何かを出来るつてことが無性に嬉しくて…」

ぼつりぼつりと言葉を漏らすイリヤ。

……そんな風に考えてたんだ。自分で思つてはいる以上に過保護になつていて、それがコンプレックスになつてたりしたのかな……。内心で少し落ち込んでいるのをよそに、イリヤの独白は続く。

「でも……一回も死にかけて、結局は命懸けの戦いなんだつて思い知らされて。…………お姉ちゃんまで危ない目にあわせて……私には、それでも戦うような理由も、覚悟もなくて……」

段々と声が沈んでいくイリヤ。心なしか身体が震えているようにも見える。

「——だから、もう戦うのはイヤです」

スカートを握りしめながらそう告げられ、凛は……

「分かつたわ。辞表を受理する」

あつさりとそれを認めた。

「いいの……？」

「元々小学生に戦闘の代理をさせようつていうのが無理な話だつたんだもの。ここまで戦つてくれたことに感謝こそすれ、止めようなんて思わないわ」

意外だつたのか、戸惑つたような声を上げるイリヤに、あつけらかんと答える凛。

「——今までありがとね。貴女はもう私の命令に従わなくていいし、カードの事ももう忘れてくれていいわ。一般人が魔術の事を知つてもいい事なんてないし、全部夢だと思つて、貴女の日常に戻りなさい」

——これでいい。ありがとね、凛。

タベのことを問い合わせたいだろうに、そんなことをおくびにも出さ

ずに労う彼女らしい気遣いに感謝する。

イリヤが戦いから離れれば、もう戦いや自分の力に怯えるような事は起こらない。あとは、私がバーサーカーを倒せばそれで終わる。

そんなことを考えている間に一悶着あつたのか、ルビーが地面に叩きつけられていた。

「一さて、そういう訳なんだけど、貴女はそれでいい？ 美遊」

凛は一呼吸置いて自分を落ち着かせると、イリヤの後ろに向かって呼びかける。

「——はい。問題ありません」

「ミ、ミユ……」

「……貴女はもう戦わなくていい。後は、私が全部終わらせるから」

美遊はそれだけ告げると、踵を返して去つてしまふ。戦うのをやめた後ろめたさからか、イリヤはただそれを見送るしか出来ないようだつた。

——私が終わらせる、か……

一人でなんでも背負う必要はないつて言つたのに、不器用なんだから。

突き放すような態度だけど、イリヤに戦わせまいという思いがありと見てとれる。

……貴女に背負わせたりなんかしないわ。

改めてそう思いながら、イリヤにバレないようにこつそりと家に戻つた。

↙エール side out ↘

第12話 無限の剣製

エール side

凜、ルヴィニア！上！

卷之三

卷之二

二人に注意を呼びかけると同時に
いた場所にナニカが降つてくる。
私も跳び上がる
直後
私達か

「お姉ちゃん！ 凜さんルヴィアさん！——砲射！」

2

「美遊！この、こつこつ？」

「美遊！」の「」にセを向いた。「」

石尊を無力化され戸惑ふと向かっていくのを
呻吟は黒鍔を

??上手くいってくればたらしく、こちらに向かつて殴りかかつてくるのをバク転で躲す。空振りとなつた拳が床を抉る度、瓦礫と化したそれらが飛び散る。

——流石はバーサーカー、といったところね。

最初はセイバー戦同様干将・莫耶を使おうかと思つたけど、私なんかの細腕で戦おうものなら例え完全に受け流せたとしても十合と保たずには腕が折れると思う。相変わらずの馬怪力だけど、斧剣がないのがせめてもの救いか……つて!?

！
氣が付けば既に壁際で、これ以上下がれない。

「あー、もう！」

間一髪、バーサーカーの股下を潜り抜け、振り下ろされた拳を躱す。

「お姉ちゃん、大丈夫!? ?」
「肝が冷えたわ…」

もう二度とあんな回避法はしたくない。

「やつぱりここ狭すぎよ。やり難いったらない」

「あの突進力はやつかいですわね……」

「どうにか足止めできない!!?」

上手いこと合流した凛達が対策を練ろうとしてはいるものの……
「無理です。魔力砲が効いていません。というより、身体に届いてす
らいないように感じます」

「対魔力とは違う、より高度な何か……！」

「まさか、宝具……!?」

導き出される答えに、凛が慄く。あの攻撃を見た上でさらに鉄壁な
んて分かれば無理もないか。……もつとも、実際はそれ以上な訳だけ
ど。

「来ますわよ！」

「くつ：私が抑える！隙をついて美遊がランサーで！」

——投影トレー・ス・オ・ン開始！

再度突進してくるバーサーカーを、ラウンドシールドで受け止める。

「グウッ！」

突進の威力を乗せた一撃は雪花の盾ですら防ぎ難い。受け止めこそしたものの、余りある力で吹き飛ばされる。

「お姉ちゃん！」

「つ……！」

踵を地面に突き立て、そのまま脚を軸に無理矢理回転する。

「ふん、にゅつ！」

吹き飛ばされた勢いを乗せて盾を投げつける。さしものバーサーカーもランクと関係なしにその質量に警戒したのか、動きを止めて受け止めた。

「今よ！」

「インクルード限定期開……刺し穿つ——死棘ボルクの槍！」

即座に美遊が回り込み、宝具を開帳する。

?????……

「はあ、はあつ…ふう」

心臓を穿たれ、沈黙するバーサーカー。正直ランクが微妙な気もしたけど、無事一度殺せたらしい。

ようやく一回……あと十一個、削り切れるのかしらこれ、つてマズつ！

「よくやりましたわ美遊！」

「エールもお疲れ」「美遊、離れて！」え？」

背中を貫いたまま肩で息をしている美遊をルヴィアが労っているけど、そんな暇はない。凛の言葉を遮りながらバーサーカー——その背中にいる美遊——めがけて突っ込む。

「…………」

「な?????！」

蘇生が完了し、再び雄叫びを上げるバーサーカー。あまりの事態に

美遊は動けていない。

お願い：届いて――！

「????！」

「?????ヤツ！」

「カフツ！」

間一髪、美遊だけは突き飛ばすことに成功したものの、私自身は無防備にバーサーカーに吹き飛ばされ、コンクリの壁に叩きつけられる。

「エールスフィール！」

「復活した……デタラメにも程があるでしょうが!?」

凛達の驚愕の声が聞こえる。

——意識飛び、かけた：けど、橋の鉄骨よりはマシね。凹凸ないし痛み全身に拡散したし。

内心で強がってはみるものの、ダメージは大きく動けそうにない。全て遠き理想郷に魔力を回しても、別にカードを介してセイバーとパスが繋がってる訳でもないので恩恵は小さく、回復には時間がかかる。

「撤退よ！不死身の相手なんてしてられないわ！」

「美遊！エールスファイールの回収を！」

「は、はい！お姉ちゃん、掴まつて！」

「悪いわね…つ！全投影、ソードバレル フルオーブン連続層写！」

姉としては不甲斐ないことこの上ないけど仕方ない。

身体強化した美遊に抱えてもらい、牽制に剣を射出して爆発させながら、凜達に続いてビル内部に逃げ込む。

——とはいえ、逃げると言つても時間が経てばストックも回復してしまうし、どうしたものかしらね……

「エール　side　out」

「美遊　side」

「ここまで離れれば……お姉ちゃん、大丈夫？」

ビル内を走ること数分。十分に距離を稼いだところで、お姉ちゃんの様子を見る。

「なんとかね…。つたく、ホント馬鹿力よ。骨が折れずに済んだのは奇跡ね」

軽口を叩きながら私から降りる姿に無理をしている様子はない。ひとまずホツとすると共に、罪悪感が胸に去来する。

「…めんなさい。私が早く気付いていれば……」

「そういうのは言いつこなし。流石にアレは反則級なもの、仕方ないよ」

俯く私の頭に軽く手を置いて慰めてくれるけど、暗い気持ちは拭えない。

「でも…私なら回復促進リジェネレーションですぐ治せたのに……」

「それは確かにね」

魔力補充に宝石を飲み込みながら、軽い口調で返すお姉ちゃん。

理屈で言えば、回復にリスクのない私が受けた方が良かつたはず。お姉ちゃんが身代わりになつても戦略的にメリットはない。口振りからそれに気付いているのは分かるのに、どうして……？

そんな風に考えながら見つめると、お姉ちゃんは悪戯っぽく笑つて、

「でも、仮にも私は美遊のお姉ちゃんだもの。妹を守るのは当然だよ」「あ……」

『俺は兄貴だからな。妹を守るのは当然だよ』

思い出すのは、別れ際のお兄ちゃんの言葉。私の心ない言葉も気に留めず、伝えてくれた優しい願い。

「……ありがとう」

思わず泣きそうになるのを必死に押し殺す。

「ふふつ、どういたしまして」

特別なことを言つたつもりはないのだろう。私のお礼をお姉ちゃんは深く捉えた様子はなく、優しく微笑む。

——でも、だからこそ。

「……空氣読んで黙つてたけど、あまり余裕ないのよ？」

「——はい」

「限定次元反射路形成、鏡面回廊一部反転——」

凛さんに促され、準備を始める。

——今度は、私が。

離界ジャングルの直前に有効範囲から抜け出す——

「——ダメだよ美遊？ 一人で残るうなんて」

「え？」

——瞬間、身体を引き戻され、代わりにお姉ちゃんが魔法陣の外に出る。

「なつ……!?」

「エールスフイール！」

ルヴイアさん達が目を見開く。

「離界ジャングル」

「！お姉ちゃん——」

サファイアの声で我に返り、咄嗟に手を伸ばしたけど、術式が発動して私達は実数域に戻されてしまった。

お姉ちゃん、どうして……？

（美遊 side out）

（エール side ）

「——ふう。なんとか間に合つたか」

サファイアによつて鏡面界から離脱していく美遊達を見送り、息をつく。

美遊の性格からして、一人で残つて戦おうとするのは読めていたし、当然そんなことをさせる気はなかつた。さりげなく私も一緒に残つて二人で戦う、という選択肢もなほはなかつたのだけど、これからやることを見られたくもなかつた。

「徹底するなら、サファイアはこつちに残しとくべきだつたかな。魔力も気にしないでやれたのに……！」

天井を突き破つてバーサーカーが降つてくる。休憩時間はおしまいらしい。

「……どこかの世界ではイリヤを守つてくれてありがとね。でも――」

黒弓を投影し、向かい合うバーサーカーに構える。

「――ここでは敵同士。乗り越えさせてもらうよ、バーサーカー！」

（偽・螺旋剣Ⅱ！）

（――！）

空間を捻じ切る勢いで放たれた一射は心臓を貫通し、バーサーカーから命のストックを一つ奪う。

「今之内に……！」

剣軍を投影し、バーサーカーの足下を破壊して地面まで叩き落とす一方で、自分はバーサーカーが作った穴から屋上まで戻る。これで少しは時間が稼げるはず。

「……とつておきよ」

そう言いながら取り出したのは、ルヴィアから貰つた宝石。私個人

の魔力では、アレは賄えないから。

「……！」

宝石を握る手が震える。アレを使えばどうなるか、なんとなく理解している。

——でも。

「もうこれ以上、イリヤ達を戦わせたくないから……。私は、あの子達の平穏な日常を取り戻す——！」

怖気を振り切つて詠唱を始める。

「——I 体 am は the 剣 born で of my sword.」

詠唱と同時に、カードと座との繋がりを意識する。

：ただ詠唱しただけじゃダメ。アイツの全てを持つてこないと、私がコレを使うことは出来ない。

「——Steel 潮 is my body, and fire is my

一つ一つ唱える度に、座からアーチャーの力を引き出していく。

「——」

ピシリ、と視界がひび割れる。アーチャーの情報が次々と流れ込み、私という存在を飲み込もうとしている。

——つ：ここからは私とアーチャーの勝負。私が打ち勝つか、それともアーチャーに飲み込まれて意識が消えるか……！

I 幾 had た created び over 戰 field
Unknow 度 も 敗 走 は な
Norknoww 度 も 理 解 さ れ な
Norknoww 度 も 理 解 さ れ な
——
——

耳鳴りがする。頭痛が警告のようにガンガンと響きわたる。風が体を切り裂くように、意識がバラバラに引き裂かれていくのを必死に？ぎ止める。

「Have 担 with stood 手 常 pain 劍 to 創 the 丘 sand 不 blade 硝 blade 利 w

Yet, those hands 生 will never hold は many 利 w

——ついてこれるか。

「つ！」

風の向こうから、そんな言葉が聞こえた気がした。私を突き放すよ

うで、激励しているような声。

——上等つ！

己を鼓舞して最後の詠唱を唱える。

「S o a s I p r a y, u n l i m i t e d b l a d e w o r k s.」

瞬間、炎が広がり、鏡面界を塗り替える。荒野に無数の剣が突き刺さり、歯車が紅い空を覆う私の心象風景。

?????『????』

突然の景色の変化に驚いたのか、警戒した様子を見せるバーサーカー。

「さて、久しぶりだなバーサーカー。もてなしを変えられないのは申し訳ないが、私にはコレしかないものでね」

そう言いながら腕を広げ、突き立てられた剣を見回す。

「——改めて告げるしよう。これより貴様に立ち塞がるは無限の剣。剣戦の極致……恐れずしてかかつてくるがいい！」

私はデュランダルを取り、向かってくるバーサーカーに挑んで

いつた。

「はあああ！」

?????『????』

↙エール s i d e o u t ↘

第13話 舞い戻る少女

「エール side」

「?????！」
「ガッ！」

振り下ろされる拳を躱し、懷に潜り込む。

「——まず一つ！」

勢いそのままに心臓を貫き、即座に距離を取る。

「……流石に速いな」

バー サーカーの様子を見て、思わず言葉を漏らす。十秒と経たずに蘇生が終わりそうな速さには最早苦笑するしかない。

「もつとも、まともにやり合う気など更々無いが」

元々この速度に追いつくために固有結界まで出したのだ。これで投影が間に合わず潰されましたでは笑えない。

既に次の矢は手元にある。いつもの黒弓より大きな弓を構え、つがえるはかの飛将軍の万能兵装。

「憑依経験、共感完了……軍神五兵！」
〔ゴッド・フォース〕

タイミングを合わせ、蘇生直後を狙つて頭を撃ち抜く。

「——一つ」

王手まであと少し。せめてもう一つは削つておきたい。

そう思い、未だ途切れることなく流れ込み続いている私の記録から、適当な剣を検索しようとした時、

「——！」

「ガッ！？」

凄まじい勢いで吹き飛ばされる。

「——馬鹿、な……」

なんの冗談だろうか。蘇生まで若干の猶予はあるという想定は、正しくも間違っていた。

——そういえば腕なしでも動いていたが……！

まさか首が無くとも動けるとは思わなかつた。最早生命力などと
いう言葉では言い表せず、執念と言つてもいい。おまけに修復しなが
ら私の落下地点に回り込もうとしている辺り、相変わらず本当に自我
が無いのか疑いたくなる徹底ぶりだ。

——が、

「私もタダではやられんよ……！」

私の意志に応え、次々とバーサーカーを襲う無数の剣。ほとんどは
傷一つ付けることは叶わないが、

「????!!?」

一本の剣がバーサーカーの肩に突き刺さる。

……驚きはしたが、思考が止まつた訳ではない。そもそも思い出す
までもなく記録の方から次々と来るのだ。ゴッドハンド十二の一の試練を突破出来る
宝具の一つや二つ見つかって当然だ。……いや、割とギリギリだった
が。

加えて、この剣の雨から的确にそれらを見つけ出し躱すことなど不
可能。残念ながらこれだけの剣で正確に急所を狙う技量はないが、私
にはこれがある。

「——壊れた幻想！」
ブローカン・ファンタズム

爆発がバーサーカーを呑み込む。流石のバーサーカーと言えど、ゼ
ロ距離内部からの神秘の開放には耐え切れない。もつとも…：

「かはつ…！」

私もその余波は受けているが、バーサーカー目掛けて飛んでいた
のだ。辛うじて直撃に巻き込まれないタイミングだったが、生身には
中々堪える。

……まあ、何もなくアレに握り潰されるよりはマシだろう。

地面に叩きつけられながらそう割り切る。骨やら内臓やらがどう
なろうが動けるのなら十分だ。

どうにか起き上がりバーサーカーを見やれば、既に蘇生を始めてい
るもの、今までと比べれば幾分遅い。

「バラバラにされればすぐ蘇生ともいかんか」
好都合だ。お陰で難にならずに済む。

「トレイス・オン
投影、開始」

確実に倒すため、一つ一つ工程を丁寧に行う。

創造の理念を鑑定し、
基本となる骨子を想定し、
構成された材質を複製し、
制作に及ぶ技術を模倣し、
成長に至る経験に共感し、
蓄積された年月を再現し、

あらゆる工程を凌駕し尽くし——

「ここに、幻想を結び剣と成す——！」

この手に現れるは黄金の剣。記憶を擦り減らしてなお彼私の中から
消えることのなかつた、かの王への憧憬の具現。

「さあ、決着をつけるとしよう」

「……」

既にヤツは射程に収めた。これを決めれば私の勝ちだ。

ようやく起き上がりつてきたバーサーカーに向き合い、剣を構える。

「…………」

「アアアアアア!!?」

互いに向けて同時に走り出す。

もはや小細工など不要。全ての力をこの瞬間に費やす……！

「邪悪を断て」

振り下ろされた拳を肘から斬り捨てる。これでもう私を遮るもの
はない。

「勝利すべき黄金の剣！」

剣はバーサーカーの心臓を貫き、確かにその命を奪つた。

エール side out

イリヤ sides

「——行つてきます！」

「え？あの、イリヤさん!?」

戸惑うセラの声を置き去りにして、家を飛び出す。
走る。——走る。——ただ一点を目指して。

「はあ……はあ……っ」

橋の真ん中くらいで息を切らす。さすがにずっと走り続けるのは堪えたみたい。でも——

「——みつけた」

橋の先にあるビル群。その中の一つが、ぼんやりと光って見える。
あそこがきっと、鏡面界——みんながいる場所。

——力に、良いも悪いもないわ。大切なのは、それを使う人の心。
——どんな選択をしたとしても、どうか後悔だけはしないで。

ママとお姉ちゃんの言葉録音が耳に蘇る。

私……私は——！

「ルビー！」

「はいはーい！呼ばれて飛び出てルビーちゃんですよー！」

決意を込めて、私のパートナーを呼ぶ。いつもはうざつたいこのテ
ンションも、今はどこか心地いい。

「行こう、みんなのところに！」

小気味良い音を立てて出たステッキを握つて転身する。なんだか
んだ毎日してたはずなのに、なんだかちよつと懐かしい。

「辞表、出した意味ありませんでしたね〜」

「え？…………ううん、きつとあつたよ。だつて……」

「？」

そう。リンさんに頼まれた戦いは、もうおしまい。だけど……

「この戦いは、私たちの戦いなんだから！」

ふわりと浮き上がり、一直線に空を駆けていく。

——私は、もう逃げたりしない！

「——いつつ……」

全身の痛みで目が覚める。

「私……えっと……っ！」

上手く動かない頭で周りを見回すと、いつの間にかもといたビル跡——いや、壊したの私達だけど——に戻つて来ていた。自分の服を見てみれば、既に外套ではなく、カードは足下に落ちている。固有結界はおろか、夢幻召喚^{インストール}すら解けてしまつたらしい。

……急激な魔力枯渇による一時的失神、つてところかな。

なんとなく状況を把握する。ただでさえ魔力が足りてないのを宝石で無理矢理補っていたのだし、むしろよく保つた方だと思う。

「まあ、バーサーカーも倒したし、あとは誰かに回収してもらうのを待つだけ……？」

……ちよつと待つた。私気絶してたのよね？ なんで平気なの？

元々存在しない空間だから、核になつてゐる黒化英靈を倒せば鏡面界はすぐに崩れる。今までのことを考えれば、もうとつくに崩れててもおかしくないはずなのに、むしろ空間が安定してきているような気さえする。

「まさか……っ！」

嫌な予感がした私は、痛む身体に鞭を打つて起き上がる。直後、

「……??？」

崩れた床から伸びる、巨大な手。それはそのまま身体を引き上げ、その姿を見せていく。

「——バーサー、カー……」

ありえない。勝利すべき黄金の剣で削れるストックは七つ。その

前に五つ削つて、確かに倒しきつたはずなのに……あ。

今の自分の状態を思い出す。

魔力、枯渇……。もしかして、魔力が足りてなかつた！？ あるいは、セイバーがいないことでの因果的不足とか……ああもうなんてこと！？ こんな失敗をするなんて……。

いくら嘆こうと、現状は変わらない。ここまで削った私を警戒しているのか、バーサーカーはゆつくりと、でも確実に迫ってくる。

「——ここまで、かな……」

既に手は尽きた。正確にはないこともないけど、圧倒的に魔力が足りない。おまけに、逃げようにも酷使し過ぎた身体は上手く動かない。

「？？？」

真っ直ぐに振り下ろされる拳に、思わず目を閉じる。

「？？？」

——イリヤ、美遊……ごめんね。

「？？」

諦めた私の耳に届いたのは、バーサーカーの悲鳴。

「……え？」

「……間一髪」

「——遅くなつてごめんね、お姉ちゃん」

思わず顔を上げた先にあつたのは、ステッキを振り切り、バーサーカーに傷を付けた二人の妹の姿だつた。

↙エール side out ↘